

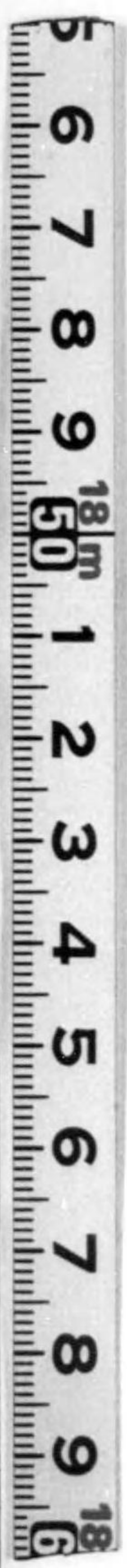
289-S021ウ



1200500732448



×
複写



始



34.4.17

289
5021

添田啞蟬坊著

啞蟬坊流生記

邦古野考房版



目次

序詩・進め新體制……………三

前記……………二五

汽車といふ怪物……………一八

初めて見る東京……………二〇

コレラの流行……………二四

船乗りになる……………二六

土方部屋……………三三

木賃宿……………三五

壯士節時代……………三九

亞細亞の前途……………四〇

青年俱樂部	一〇
書生の天下	二六
保安條例	三三
壯士・讀賣	三七
福島中佐と郡司大尉	五五
故郷大磯の變貌	六三
日清戦争	八六
戦後の腐敗	九六
ドースル時代	一〇五
俱樂部の精神	一二六
東海矯風團	一三六
實家の危機・レース工場	一三六

自由黨解消	一三三
俱樂部の消滅	一三九
家庭・二八新報	一四四
新派・朦朧車夫・「雪紛々」	一五〇
男の子・茅ヶ崎	一五五
日露戦争前後	一六六
關西の旅	一六六
大阪・日露戦争	一七三
ラムプ屋	一八四
うしほ會	一九二
旅の留守宅	一九五
東北遊説	二〇二

朝顔の家	三〇八
あゝ世は夢か	三三三
高山製作所	三三九
兩元堂事件	三三三
父の死・母	三三七
演歌新風	三三三
孝行	三三三
妻	三三六
幽霊句會	三四三
演歌者の群	三五〇
いろは長屋	三五七
むらさき節	三六三

兄弟	三七
大正略記	六三
輕便安直	六三
貧民・演歌組合	六九
舊友通信	一〇一
大震災	一〇五
精神生活	一三八
天龍居語録	一三九
遍路記	一三八
四國の土を踏む	一三八
獨り歩く	一三三

啞蟬坊流生記

添田啞蟬坊

お	修	行	………	三六				
土	佐	は	鬼	國	………	三四〇		
遍	路	宿	………	三四三				
御	免	の	渡	し	………	三四七		
走	り	遍	路	………	三五〇			
お	接	待	………	三五三				
善	根	宿	………	三五九				
歳	晩	の	遍	路	宿	………	三六三	
安	宿	………	………	三六九				
歸	つ	て	………	三七七				
索	引	………	………	三九〇				
啞	蟬	坊	作	品	年	表	………	三九七

序詩

進め新體制



新體制 新體制

殻を破つて生れた新體制

われは汝を信じ 汝を愛す

汝新體制上健かに育て

存分に伸びよ新體制

逞しく展べよ新體制

われは汝の生長をじつとみつめて

どこまでもついで行く

歩め堂々と歩め

進め勇敢に進め

お、堅實なる歩みよ風采よ

新人を中心とする汝の推進力

眞摯なる新体制の發足だ

劃期的壯舉に敬意を表す

さらば

自由經濟個人主義 みんな御苦勞であつた

さよならだ 進め新体制

だが 汝は唯單なる反動ではない

総合的な眞實を把握して行く

「新」体制であらねばならない

政治の無力に倦み切つた國民を活かし

完全に一體となつて行くのだ

生きて動く生き物、一つの生命體になるのだ

そして、

革新の痛烈な鞭を揮つて踊るのだ

汝は既に一國一黨をも否定した

善哉 善哉

汝の進むべき道は詔書に明かなり

國民全體の 意志の總力を以て

内外のあらゆる障害を粉碎し

大政翼賛の實を擧ぐるの重任は

汝の雙肩にかゝつてゐる

一億一心 以心傳心電波の如き

活動實踐の妙技

權威ある指導こそ汝の使命である

往け 裸で往け 滅私奉公

急げ 眞實の新體制

めまぐるしい世界情勢の變轉

緊迫せる内外の諸問題は山積する

議論のヒマ無し議論は戯論だ

戯論は末梢神経のわざくれだ

言葉多きはシナ少し

船頭多きは船を誤る

基本の方向へ眞ッ直ぐに進め

確信を以て進め

威嚴あれ新體制

力あれ新體制

汝は先づ根本國策に據るところの

經濟 新制度の確立に全力を致さねばならぬ

案にシゴトに身も魂も打ち込んで

一貫統制を全面的に成さねばならぬ

汝は優者なり これを汝の手腕に俟つものは

獨りわれ等のみではあるまい

もはや構想の段階ではない 實行だ

頭腦のシゴトから吐の藝當へ

そして小手先の術 下手なノロくさい手を出されると新鮮な魚を腐らす

猛進せよ 大膽なれ

國家經濟の土性骨をたゞき直せ

八面六臂の大活動を要望する

迅速なれ

一日遅るれば千日の損失

否 國家千年の大計を誤る

これ正に容易ならざる現實である

不可避の問題である

躍進又躍進 萬難を排して斷行せよ

荆の道 何かあらむ

しかと民意に立脚して喜憂を共にせよ

力の新體制

熱の新體制

いざ進め 堂々と進め

されば斷行の爲には各人に犠牲を拂はさんも已むを得ざる事なり

各人も亦既に覺悟してゐる

強く正しく指導せよ

生きた政治の範を示せ

國民に新生命を附與し躍動せしめよ

今や國を擧げて其の必然を感知し自覺して

汝の指導を待つて待ちクたびれてゐる

國民各層の覺悟は出來て 出來過ぎてゐる

公益優先の姿勢は整つてゐる

打て

鐵は熱した時が鍛へ易い

國民が革新に對し かくまで足並を揃へて恭順に素直に成り得たことは何に

依るか

大政翼賛の新體制よ

汝こそ

意義ある革新の合言葉だ

盤石の根を施政に下ろせ

大なる「和」の精神よ全體主義よ

萬物融合の上に成り立つ新體制よ

奉公の熱誠よ 生氣よ

生氣は生氣を産む無限の力だ

高度の總力發揮だ

堂々と前進せよ大東亞の建設に

三國同盟

緊張を新たにし

更に一段の鞭を加へて猛進せよ

世界維新の魁

有史以來の大試鍊だ 創造だ

創造力總動員の新體制

いざ進め

新體制

「斷じて行へば鬼神も避く」べし

小田原評議は禁物だ

「議論より實を行へ怠け武士

國の大事を他所に見る馬鹿」

と維新の志士は喝破した

認識不足のしれ者は蹂躪ふみにじつて

尻目にかけて

いざ進め 堂々と

前進せよ新體制

千波萬波 世界の波は荒い

怪しくうねり狂ふ大洋を乗ッ切る回天の放れ業

嵐の中の轉換だ

時まさに秋 幸先よし

實りの秋の新體制

(陸軍畫報・二千六百年十一月號掲載)

前記

○ 屑屋にて

拜啓

私は今、屑屋の倉庫の二階の一隅に巢を構つてをります。斯くいふと、如何にも鼠の住みのやうにもあるが、どうして四疊半の堂々たる座敷、東と南の二方ガラスの明るい室、南窓を展けば目の前が高木鐵工場、モーターの音も聞き馴れて、下手な音楽よりよつぽどいゝとも思つてゐます。本所は菊川町二丁目。「古物廢品仕切場」の屋根看板が掲げてあります。

こゝの主人公は、東京廢品回収問屋商業組合の理事長であり、大日本廢品回収問屋組合聯合會の副理事をも兼ねてゐる、高橋勝作といへばその長々しい肩書はなくとも、屑物問屋仲間のキケモノ

です。新體制など稱へられる以前から、業界の刷新運動をつゞけてゐた爲に、都下七十餘の「廢品買出人組合」の一萬三千人の買出人はもとより、名古屋、大阪、遠く滿洲、北支まで、其の名と義心が鳴り響いてゐる快漢。その性格は、立雲遠山滿翁から贈られた「士魂商才」の額面が最もよく物語つてゐる、中々豪いオヤヂです。

私はその店員といふても、名ばかりの店員で、居候。いはゞ人間の屑のやうな存在であります。従業員は會計主任、帳場係員、仕切場、ゴタ場、撰伸工、荷造り、道具市場、それぞれの職場に奮闘善戦してゐる、その中にブラブラしてゐるので、子供や子守の中で「あの人は立場の會長さんだ」と云つてゐるのが耳に入つて苦笑したことがある。何でも長と名のつくものはブラブラしてゐるものと子供は思つてゐるらしい。

防空防火演習などでも、隣もその隣も、従業員と其の妻子で一團一群です。大した抱擁力だ。屑物の立場――。

昔は屑屋といへば輕蔑されてゐたものだが、実際には「製紙原料」「輸出ボロ」其の他一切の廢品を生かすところの、つまり生産従業者で、重要な存在なのです。殊に物資缺乏の非常時、事變下に

於ては、國策上幾層倍もの重要性を加へて來てゐることは、興亞奉公日に於ける廢品回収（月一回一戸少々づゝの廢品献納が、一ケ年には五十幾萬圓の献金奉公となつてゐる）などがあつて、既に天下周知のことであるから、今更語る必要もないであらうし、又幾多の話の種はあるが、しかしこゝでは「屑屋の屑談議」はしてはゐられない。

私は今、課せられて、私の身の上を語らうといふのだ。

啞蟬坊が語る啞蟬坊の身の上ばなし。

それは到底世に謂ふ自叙傳といつたやうなものではない。四角張つた立志談であらう筈もないし、立派な説傳でもあるわけがない。世間相場からは、まるでケタの外づれた、馬鹿者の馬鹿物語りに過ぎないことは、前以てお断り申し上げてをくことゝしたいと思います。

汽車といふ怪物

話は五十五年の昔にさかのぼる。

日本に、まだ鐵道といふものは、東海道線も出来ない、僅かに東京横濱間にしか開通してゐなかつた頃です。東海道大磯在の百姓の次男に生まれた私は、十四の春、父に連れられて、東京深川の叔父の家に行くべく、故郷を出立して、神奈川の青木の臺まで来た時、眼下の右手から走つて来た「怪物」を見た。私の眼にはほんとに怪物であつた。父は、

「あれが汽車といふものだよ、あれに乗つて、東京へ行くのだ。」

と言つた。汽車といふ怪物、生まれてはじめて見た、しかも二三丁離れたところで見たのだ。人の話では、岡蒸汽が出来たとか、鐵道へ乗つて見たいものだとか、聞いてはゐたが、それを、その實物を見たのだ。生き物のやうに煙を吐いて走る、汽車を見たのだ。

私は黙つて父に従つて神奈川の驛に入つた。其處から其の汽車へ乗つたことは覚えてゐるが、其

の外の記憶は、夢幻のやうで、残つてゐない。たぐりやうがない。

○

叔父の家に着いても、私は田舎の子で、ぼんやりしてゐたから、父と叔父との間に交はされた話などは、私とは世界が違ふものゝやうで、要點も何もあつたものではないが、たゞ、私を海軍兵學校へ入れるとか、横須賀へ連れて行くとか、年齢が足りない、満十五歳でなければどうのかうのと云つてゐるのが耳に入つたが、よく覚えてはゐない。

たゞ、叔父が私の顔を見ながら、

「海軍の士官になつて、軍艦へ乗るんだよ。」

と笑ひ顔で言つたことだけは、印象に残つてゐるが、軍艦なんでものは見たこともないのだから、夢のやうな氣がしてゐた。

たゞもう早く東京見物がしたい、遊びたいといふ心持ちだけが強かつた。

それに東京の味噌汁は、甘酒でも飲むやうな氣がしてゐた。白い富貴豆や、鯉の甘露煮、昆布巻、甘いものばかりで飯を食つたことだけ、よく覚えてゐる。

父は二三日すると、私を置いて歸つて行つた。

初めて見る東京

私はしばらく遊んでゐた。墨田川の一錢蒸汽へ乗つて、淺草の觀音様へも參詣する。一區二錢の鐵道馬車へも乗つて見た。その頃の淺草の情景は、當時流行の「仙臺節」によく映されてゐる。

淺草煉瓦を通つてみたら

おもちや屋寫眞に小間物屋

素敵に高いは五重塔

山門向ふは淺草寺

裏へ廻れば奥山の

うき身やつした白狐

みんな田甫へ コレナンダイ まねかれる

未だ十二階も出來てゐなかつた。五重塔が一番高い建物であつた。奥山の後の千束田甫を、裏田甫と言つてゐた。「白狐」がなんであるかは、その時は知る由もなかつた。

奥山には色々な見世物があつた。永井兵助の居合抜きもあつた。「女大力」が一番の人気だつた。

これは女角力と大力を見せるので、女が仰臥した腹の上に船を乗せ、その上に又人を乗せる。その時、イツチャーイツチャーイヤツチャナ、といふ唄の掛け聲をする。此の唄は房州海岸の俚諺で、此の女大力の一行は、多く房州女だつたといふことは、だんだんに知つたことだが――

イツチャカ節

牛蒡ちやキンピラ牛蒡 マタ

お船頭さんは ナーエ

色の黒いのが ズイラサノ

味がよい ナーエ

イツチャ／＼イツチャアナー

女大力の見物に、此の唄が口吟まれて、流行にまでなつたのだが、後に房州海岸へ行つたら、至る處でこれがうたはれてゐた。

祭文小屋が、池を背後にしてあつた。演臺の前には腰掛が幾側も並んでゐて、チヨンガレの合間に、時々木魚を叩く、チヨボクレになつたりする。さわりにかゝらうといふ時に、箆を持つて腰掛の間を錢を集めに廻るのだが、勿論祭文のファンはそれぞれ小錢を投り込むが、箆が廻つて来る氣配を見ると、スーツと立つて出てしまひ、集め終つたの見計らつて、スーツと又入つて来て腰掛けるといふやうな者も中々多かつた。しかし、私たちのやうな子供のころへは、どつちにしても箆をつきつけるやうなことはしなかつた。

秋葉の原も當時の盛り場で、祭文もあれば見世物小屋もあつて賑つた。チャリネの曲馬がかゝつたのもこゝだ。風琴を鳴らして来るパン屋もゐた。それが「チャリネのパン、チャリネのパン」と呼んでゐた。一個五厘の餡パンだつた。

左衛門橋の向ふに「蠟燭屋」の茶番狂言があつて、一朝、元朝などいふのが評判だつた。泥棒が入るところで壁を突き破る恰好をしながら、口で「ドン」といふ音を言つたりした。獲物を肩に

「——大願成就。討手のかゝらぬ内に、少しも早う——」と花道の七三にかゝつたところで、うしろから、「曲者持てえツ」と来る。すると、「くせえものはつかまらねえ」と泥棒がいふところで、どツと來たりしたものである。

蠟燭屋一朝、元朝、三朝などいふ藝名だつたが、その何朝だつたかゞ親で、あとはみんな子供だつた。此の茶番狂言を、一般に「蠟燭屋の芝居」と呼んで通つたものだが、後の鶴屋團十郎などが、淨瑠璃などで幾分藝は入つたとはいふものゝ、寧ろ「蠟燭屋の芝居」の方が面白味があつたやうである。

佐竹ッ原も盛り場だつた。小傳馬町の牢獄の跡が、「牢屋の原」といはれて、これも盛り場だつた。何れにも祭文小屋があつて、デロレンデロレンとやつてゐた。他は知らず、これらが私たちの及ぶ範圍の娛樂地であつて、要するにこれが、「兩國」以後の盛り場だつたのである。その頃一杯二錢の駄汁紛で満腹したものだ。井も大きかつたし、餅が二つ入つてゐて、それが又大きいこと、その一つが、後の所謂「切餅」の四つ倍はあつたものだ。

コレラの流行

叔父は汽船の乗組機關士であつた。不在勝ちであつた。おばさんは、教養の低い人であつた。親しみのない人で、私とはどうも氣が合はなかつた。

丁度「花ちゃん」といふ従妹の出來た時であつたが、これを寝かしつける子守唄を聽いて興ざめがしたことがある。添ひ寝をしながら、低い聲でうたつてゐる。節はまことにうまいのだ。リズムだけなら實にいゝのだが、「——ねんねん、猫の尻、蟹が匂ひ込んだ、やつとこさと引きすり出したら、またア匂ひ込んだア。」——これをあの哀艶な子守唄の節で、何度でも繰り返すのである。子供心にも、なんとか言ひやうもあるだらうにと思つたことであつた。やつぱり國の人であつたが、田舎の話をし出すと、「——麥畑でよ、喧嘩しながら、麥刈るのが面白かつたよオ」と言つた調子であつた。

叔父が機關士であつた關係で、始終遊びに來てゐた幾人もの船員と知り合つた。船員たちは皆私を可愛がつてくれた。

其の中の、石井さんといふ人に連れられて、高橋通りの夜店を見に行つた歸りに、馬肉屋へ入つた。石井さんは酒を飲んだ。

「これは馬肉といふのだ。食べろ食べろ。」

とすゝめた。私ははじめて馬肉を喰つた。其の時「馬肉鍋御一人前金二錢」と書いた張り紙を見たのを覚えてゐる。（——先日、知道と古河三樹君と三人で、その店を探しあて、馬肉を喰べた。代は變つてゐるに違ひないが、間口も中の模様も同じで、懷舊の思ひが私には深かつた。）

叔父の家の隣は、眞壁といふやはり船員で、叔父の友人であつた。此の人も不在のことが多かつた。其の細君は若い美人で、無邪氣で、近所の十三位の娘たちが五六人づゝ毎日遊びに來る。そして私を呼びに來る。さまざまな事をして遊んだ。私は、おばさんとゐることが退屈だつたから、多く隣で遊んでゐた。

隣の細君は私たちと一緒になつて、目かくしの鬼ごっこをして遊んだり、お菓子を呉れたりした。その時はやりの「さいごどん」といふ唄をうたつて、三味線もひいたりして、よく笑ふ細君であつた。

月夜鴉とナア 口ではいへど

嘘のつかれぬ此の時計

ズイトコキヤ行かいてもかまふこたない

サーイコドンくくサーイコドンくく

サーイコドンくくドン

サ、サーイコドンくくドン

夏になつた。明治十九年の夏だ。

コレラ病が流行して、随分近所からも早桶が出た。三つ、五つ。だんだん殖えて大騒ぎになつた。それに他の町から出たコレラも、皆砂村（今の砂町）の焼場へ運ばれて行くのだつたが、私たちの前や後の通りが、その通り道であるために、よく目に觸れた。

「早桶ばかり通つてイヤだねえ、」

と言ひながら、誰もが早桶の勘定をして、又三つ通つた、又五つ通つたなど、報告し合つて騒いだ。おばさんは、

「ソんなものを見ないで、家に入つてゐな。」

と言ふのだが、やつぱり人が見て騒ぐから、見に出たかつた。夕方、七八つ續いて行くのを見たことがあつた。

子供たちは、誰も「さいこどん」の唄をよくうたつた。すると大人は、殊に「おばアさん達」は顔をしかめて、「イヤだイヤだ、サー行こサー行こうなんて、いやなことだ、」と此處彼處でヒソヒソ話をしてゐた。

明治十五年の大コレラの時も、うすうす覚えてゐるが、私たちの田舎では、村境へ石炭酸を四斗樽へ入れて置いてあつて、兩方の村でそれを酌むやうに、竹の杷杓が置いてあつた。私もこわこわそれを竹筒の中へ酌み込んで、後を見ずに、どんどん逃げるやうに歸つたことがある。其の時と劣らないほどの大コレラであると思つた。

叔父は勤勉家であつた。も一つ上の機關手の免状を取らんがために、不足の學力を補ふべく、夜學に通つてゐた。或る夜、自由黨と間違へられて、巡查に調べられたと言つて歸つて來たことがあつた。私は自由黨が何であるか、その意義も知らなかつた。

私は船員たちと機械の話を度々交はしてゐる中に、機關士にならうといふ氣になつた。私は叔父よりエライ機關士にならうと思つた。

船乗りになる

やがて叔父に背いて、叔父の手を離れた私は、船乗りになつてゐた。

職務はボーイ。(機關士になるには、石炭夫から火夫、油差しと實地修業をして、試験を受けるのだ。然しそれにはまだ年齢が駄目であつた。)

最初淺野汽船の鶴丸から、豊瑞丸、それから郵船會社の神戸定期へ乗り組んだ。これは高級船員は皆外國人であつた。

夜の遠州灘航海中、下等(三等のこと)船客ボーイの當番で、トン／＼トン／＼プレートへ昇つて、運轉手に向かつて、夜勤當番の報告をする。

「——ワツチ、ステレチボーイ、」

といふと、運轉手は、

「オーライ、」

と答へる。一時間毎に此の報告をする。當番は確かに眠つてはをりませんといふわけだ。

その一時間毎の、運轉手の「オーライ」を聞く外は、機械の音と、船の波を切る音ばかり。夜の淋しさも味はつた。

私は船の上で、憲法發布のことを聞いた。

ある時は、大きなシケを食つて蒼くなり、ひどく苦しんだこともあつた。

清水といふ二等機關士は、いろいろ面倒を見て呉れた人だつたが、

「君はどうも、海上生活者には成り切れまい。」

と言つた。つまりは私の體質を見抜いての言葉だつたのだらう。自分でもさうだと思つて、海上生活を斷念してしまつた。

それから二タ航海して、船が横濱に入つた時、下船した私は、當時名古屋丸に乗り組んでゐた、藤高といふ親友を訪ねて、共に上陸して遊び廻つたり、一人で遊んだりしながら、友人の船を假の

家のやうにしてゐた。

ところが或る日、町から歸つて來ると、その船が港に見えないのだ。

だんだん聞いてみると、名古屋丸は、コレラ流行の爲急に檢疫船になつて、横須賀沖へ繫留することになり、横濱を出帆してしまつたといふのであつた。しかもそれは、當分任務はつゞくだらうし、何れにしろ歸港はしないのだといふことが解つた。

私は親友に、身の振り方について相談中であつたし、それが未解決のままであつた爲、途方に暮れた。

どうでも追ひかけて、いま一度逢はなければならないのだ。

それにさしあたり、家のやうにしてゐた船が出てしまつたのに、困じ果てた。

其の夜は野毛の大神宮の境内へ登つて、灣内の船の灯を眺めてゐた。境内の茶店の縁臺に寝て、犬に足をなめられたりしてゐる内に、うとうととしたところへ、神官が巡つて來て起こされてしまつた。

身の上を調べられたが、社務所で結構なベットをこしらへてくれた。

ドン／＼ドン／＼といふ朝のお勤めの太鼓の音で目を覺まして見ると、旭が昇つてゐた。

あたゝかい朝飯をいたゞいた。神官の親切がしみじみ身に沁みだした。

土方部屋

私は横須賀に向かつて歩き出した。

如何にしても、もう一度藤高に逢はなければといふ心であつた。

高い山ではないが、山又山の十三峠の、どのあたりであつたか、私の記憶はボーツとしてゐるが大きな松の根に腰かけて、休んでゐた。疲れ切つて、空腹も感じてゐる。と、そこへ、土方風の男が來て、傍へ腰を下ろして話しかけて來た。

私は檢疫船のことを話した。そしてハシケ舟の出るところなどをたづねてみた。するとその男の曰く、

「ハシケはあるまい、又あつても普通人は本船の方で受けつけまい。何しろ横須賀は軍港だからな

ア——」

私は失望して、いよいよ困つた。男は、

「船へ行かなけりや友達に逢へないといふのなら、行つても無駄ぢやないか。——それより、俺と一緒に、俺のオヤチのところへ行かないか。」

と言つた。そして、土方生活の氣樂さや面白さや、食ひ物のことなどをしきりに説いて、

「お前なら、帳つけでもしてゐればいゝ、遊んでるやうなものだ。」

と喋り立てる様子と顔つきが、滿更悪い人間でもないやうだと思つて、同行することにした。その内になんとかなるであらうといふ氣であつた。

行く先は、横須賀楠ヶ浦の奥の勝力といふところであつた。陸軍御用で、岩山を切り崩して、其の岩を運んで、觀音崎と上總の富ツ津洲との間の海の中に、第一第二の海堡を築く仕事である。田口組の請負で、その下請けをしてゐる、六間堀傳吉といふオヤチの帳場であつた。

私を誘惑した土方は、六間堀の身内のもので、幾月か前に飛びツチヨ（すらかるること）をして、又舞ひ戻るのに、具合が悪かつたのであらう。そのてれかくしに私をだまして同行したのだ。私は

彼の歸參の手土産にされたかたちであつた。

勝力の岬からも、山からも、横須賀沖の名古屋丸は見えてゐる。見えてはゐるがどうにもならず友達の乗つてゐるその船を、空しく眺めながら、私は働いた。

此の部屋の人で、今私の目に浮かぶのは、オヤチの傳吉と、其の女房の新島女、岩さん、定さんおいらん清といふ花魁の入墨をした男、下タ部屋の兼さんなどで、あとの數十人の顔は個々に浮かんで來ない。

こゝの仕事場で、一番の人氣者は、馬鹿の大森といふ四十歳ばかりの鈍な男と、私との二人であつた。其のお人好しの大森は、周囲から「コラ大森ツ」と脅かされたり嘲弄されたり、私は若造々々と珍重され、又馬鹿にされたりで、働いてゐたのだ。

其の頃の勞銀は、本職が二十五錢、素人八錢であつた。勿論食ふた外である。飯は普通人より多く食ふ。四ツ飯と八ツ飯といふのがあつて、五度飯を食ふのだ。

仕事が荒いから腹もすく。ハツパ、タガネで岩へ穴をあける。ハツパを仕掛けて點火して逃げたり、タマには入れ鉄といふて、モツコへ砕いた岩を入れること、——二本三本のモツコの擔ぎ方に

間に合はずのは、一人前の土方のすることだが、私はそれをして、ほめられた。飯は優に一升飯を食つたと思ふ。

「大森は飯は一人前だが、先棒かつぐより他に能はない」と言はれてゐた。大森は私に度々言つた。「勘定日だつて今まで一錢も呉れやしない。」——そして、肩を撫でながら、「棒熱でこんなに服れた。」とこぼしてはゐたが、私は十四日晦日の勘定日に、五錢か十錢、渡された。そして其の度に此の次の勘定日には皆やるといふオヤヂの顔に見え透くものがあつてをかしく、吐も立てなかつた。それでも皆、朗かにうたひながら、喜々として働いてゐた。

お前受け出す 身うけの金は

ハツバ タガネの 尖にある

私は友人の船を沖合に眺めるばかりで、町へさへ出られなかつた。(無論町へは山越えをするのだが、見張り番が頑張つてゐる。) だがかうしてはゐられない。私は兵隊検査が近づいて來ることも氣になり出した。なんとかして抜け出して、自由の身にならねばならないのだ。脱出の工作おさおさ

怠らなかつた。

いよいよ時は來た。下夕部屋の兼さんの部屋に預けて置いた包と傘を受け取つた。さてその脱出の模様などは、小説とかいふ讀物の領域だらう、今の私には煩はしいことだから省略する。

木 賃 宿

首尾よく勝力を脱出した私は、楠ヶ浦の海岸で、印絆纏と草鞋を脱ぎ捨て、小包から結城の單衣と兵兒帶と下駄を出して装束を更め、不用品は皆海中へ投げて、蝙蝠傘をバチンとひらいてホツとする。

そして横濱へと志して、裕々と歩き出した。海軍鎮守府前から造船所を通り、逸見の海兵團の裏手から、十三峠の登り口にさしかゝつた。

時は既に午後の三時過ぎであつた。あたりには人影もないと思つて見たら、坂の下に、六十位の善良さうな細顔の「蝮とり」がゐて、

「——何處へ行くのかね、」

と言つた。私は横濱へ行くつもりなのだと言へたら、

「それは無茶だ。もうすぐに日が暮れてしまふ。」

と警告して呉れた。私が考へてゐると、

「逸見へ泊つて、明朝早く行くがよい。」

と親切に宿を教へて呉れた。

其の頃逸見に木賃宿が二軒あつた。伊豆屋と甲州屋と隣り合つてゐた。

「俺は永く甲州屋に泊つてゐるが、お前は隣の伊豆屋へ行け。伊豆屋の方がいゝ宿だ。」

との教へに従つて素直に伊豆屋へ泊ることにした。

宿錢は四錢であつた。一ぜんめし屋で飯を食つて、寝ることにした。宿の娘のお榮さんといふのが、飯屋へ行くのは不經濟だから、家で自炊をしなさい、其の方が安くつきますよ、と教へて呉れた。生まれてはじめて木賃宿へ泊つたのだ。

早朝出發しようと思つてゐると、

「働きに出る者はないか——」

と大きな聲で二階へ呼びかける者がある。人夫頭だ。すると定連と見えて、五六人、早々に應じて行く者がある。その光景をぼんやり見てゐる私に向かつて、頭が、

「お前は行かないのか。——誰にも出来る仕事だぞ。」

と言つた。私は考へた。私は金がないのだから、此處で稼いで、旅金を得よう、得られようと思つたので、それに隨いて行つた。

其の日の仕事は海兵團の庭内へ、何やら建物が出来るので、其の基礎工事のエンヤコリヤの綱を曳くのであつた。

仕事は半日で終つた。一日の賃金は二十五錢だが半日だから十二錢五厘渡された。土方部屋でろくろく錢の顔も見ずに暮らして來た私は、現金を手を受けて、其の時は嬉しかった。

木賃宿で、其の時代には一日十二三錢あれば、どうにか生活が出來た。

米は一升八錢が十錢に騰つた時で、高い高いと言つて騒いでゐた聲を、今も聞き覚えてゐる。細長い南京米が輸入された。その南京米は一升四錢か六錢かであつたかはつきり覚えてゐないが、水

兵さん達が、三々五々連れ立つて市中を歩きながら、

米が十錢すりや ヤッコラヤノヤ

唐米チヨサンは臭い ノーチヨサン

とうたつてゐた。其の當時の流行唄だ。外米が初めて輸入されたのだらう。(徳川時代に既に入つてゐるといふ記録があるさうだが、私たちには、あの細長い顔は、その時が初対面であつた。)

運命といふ奴は不思議なものだ。横須賀よさらばお別れといふことになつて、其の横須賀に又腰を下ろしては見たものゝ、旅金といふほどの金は中々得られず、するするに、人夫をした。軍艦のカンカン虫、石炭の積み込み、造船所の常備人夫にも出た。その内に友達も出来て、共同で間借りをしたり、果ては上島の龜さんといふ、新進の人夫頭に信用されて、其の部屋へも入つた。そして横須賀が第二の故郷のやうにもなり、それが又壯士節演歌者の群に投ずる段階ともなつたのである。彼の時、「蝮取りのオヤヂ」に遇はなかつたら、私といふものが、どうなつてゐたらう。たゞ行きすりに口をきき、宿を教へられただけの「蝮取りのオヤヂ」の顔は、今もまだ、私のまぶたに残つてゐる。

壯士節時代

亞細亞の前途

横須賀に住み馴れてからの、私の娯樂は、たまに浪花節を聴きに、寄席へ入るくらゐのものであつた。

その頃、大瀧町の谷川亭にかゝつた浪花節は、後に桃中軒雲右衛門になつた小繁、その弟の繁吉などであつた。私は吉川小繁が好きで、喜んでこれを聴いた。

或る夜、又小繁を聴かうかと思つて、大瀧町の通りにさしかゝると、異様な風俗の三人の男が、何やらしきりに呶鳴つてゐるのだ。人は黒山のやうであつた。私はその群集の中へ割り込んで行つた。

編笠を阿彌陀に冠り、白い兵児帯をぐるぐる巻いた若者が、手に手に太いステッキを持つて、交る交る喋つたり歌つたりする。その時は、始まつてもう餘程経つてゐたらしい。一人の、演説口調

の元氣のいゝ聲の切れるのを待つてゐたやうに、次の男が、

「マア、此の歌を聞きたまへ。」

と言つた。三人聲を揃へてうたひ出した。それが、

「——悲憤慷慨亞細亞の前途を觀察すれば、」

といふうたひ出したのだ。私は驚いた。そして、耳をすました。

悲憤慷慨亞細亞の前途を觀察すれば

文運月に進み行き

治外法權撤去せず

跋扈無禮の赤髯奴

ちやん／＼坊主に膝を折り

日々に衰ふ國の状態

一朝眠り覺める日は

眼碧人におだてられ

總身に智恵が廻りかね

武運盛んな日本も

稅權回復まだならず

一葦隔てし朝鮮は

鴛の威勢に恐怖して

支那は眠れる象なれば

侮り難き敵なりと

喜ぶ孔子の末孫も

内に亂戰絶間なし

アフガニスタンやビルジスタン

其他無數の小邦も

詮じ来れば東洋は

蹂躪せられて對等の

悲憤慷慨胸に滿つ

自ら任ずる我國の

砥げよ研げよ文と武を、

英吉利佛蘭西獨逸露西亞

旭の輝く日章の

讀したら大愉快

安南ビルマ印度國

皆是れ佛英の殖民地

泰西諸國の權勢に

地位を得てる國はなし

東洋亞細亞の英國と

活潑有爲の青年は

文武の二道を研磨して

敵を選ばず打据ゑて

國旗をヒマラヤ山頭に

愉快ぢや愉快ぢや

(殿江醉卿作)

かうして三人の男は、所謂亞細亞の大勢を、うたひ且つ論じ立てるのであつた。私の驚きは昂奮に變つた。興味となつた。そして男たちは印刷物を賣るのだつた。これが壯士節と云はれるものだつた。

歌は續いた。今度は「憂世武志」といふのであつた。

十人は十色なるほど世は様々よ

藪食ふ虫もあるとかや

世界に稀なる土地なるに

無暗に西洋々々と

隣の雑炊食ひたがる

西洋人とて同じ人

西洋人とて恐るゝな

先を奴隷に使ふとも

たとへ交際するとても

先が上手に出るならば

文明國とは表向き

左も親切に見せかけて

堅く積鼻繩引き締めて

日本は古來美國とて

何が不足か知らないが

自家の鮪をば打棄てゝ

これぞ世に言ふ愚者ぞ

舶來品とて同じ品

舶來品とて貴ぶな

此方で奴隷となる勿れ

互格にするなら宜いけれど

いつそ交際せぬがよい

其實素的な狡猾ぞ

鼻毛抜くのが奥の手ぞ

取りかゝるべしかゝるべし

憂世ぢやないかいな

眉毛をばしめせ皆さん化者共に

つまみ込まれぬ用意せよ

義氣に富みたる國なれば

正義をばげむ餘習に

健氣な振舞多かるに

メツキ細工やテンブラの

強きにへつらひ熱にうき

さても呆れた事なるぞ

淡白無垢を粧へど

手車従者に堂々と

俳優仲間が友達ぞ

娘と云へど私窩子あり

紳士社會の花合戦

我が日本は往昔より

弱きを扶け邪を挫き

禽獸非情の物までも

兎角世の中澆季となり

主義は社會に行はれ

輕佻浮薄な人心

東髮頭の女學生

醜聞日々に絶間なし

奥方風を飾れども

藝妓と云へど娼妓なり

山師の起す會社類

其他數多の化者が

汚れし行爲得意顔

文明開化を誇るとは

恐るべし又嘆くべし

憂世ぢやないかいな

(鬼石學人作)

世間知らずでゐた私の心にも、海員の中や土方部屋にも入り、人夫もしてから、やゝ世間の實狀がわかりかけて來てゐた。そこへかうした歌を聴いたのだ。そして、其の風變りな歌ひ手を見たのだ。——驚異であつた。感激であつた。

其の歌の印刷したものを買つて、浪花節の方はもうそつちのけにして、歸つてからも、しばらくは眠れなかつた。

歌本の裏面には、

普く天下の同志を募る——

但し身體健康、學力あり愛國の志ある者に限る

青年俱樂部

と記してあつた。

壯士節の奴めは、するすると私を引きずつて行つた。何處へ行きすつて行つたのか。私の幼稚な人生觀なるものを、根底から變へさせをつたのも此の壯士歌であつた。

買つて戻つた歌は皆覺えてしまふ。節廻しも、聲も相當なものであつた。二三の友人から、君が一番上手だとほめられた。

そして、間もなく、青年俱樂部から歌の小冊子を取り寄せて、うたひ流して歩く自分自身を、横須賀の町の小路々々に見出したのであつた。

當時原價四厘の歌本を、壯士達は一錢五厘で賣つてゐた。私はそれを二錢に賣つた。街頭に立つ危懼がやがて深甚な興味となつた。賣れ行きは素敵によかつたのだ。幾日かの後、私は「壯士節」の中に据わる私自身の、確信を得た。

此の時であつた。兵隊検査を受ける爲に、久々で郷里へ歸つた。

母と姉とは、不孝な放浪兒のために、結構な着物を仕立てゝ、待つてゐてくれた。早速姉が着て見るといゝと言つて、着せかけてくれるのを、母がニコニコ笑ひながら、「馬子にも衣裳ツて、よ

く言つたもんだ」と言つて喜んだ。

検査の結果は乙種であつた。

再び、横須賀に出た。

そして私は壯士の眞似をして、横須賀を中心として、三崎へかけて三浦半島を放浪したり、房總半島へ渡つてみたりした。房州でだつた。私が壯士節をうたつてゐると、大きい商店の主人公が出て来て、

「やア結構な、勇壯なお遊びですなア、僅かばかりで同感を表しませう。」

とて、一圓紙幣をくれた。

私がそんな、氣まかせな放浪をしてゐる間に、まだ相見ざる青年俱樂部本部員の中で、私は有名になつてゐた。

「おい、横須賀に添田といふ男がしきりに活躍してゐるやうだが、一體どんな男だらう。今日も何百部送れと言つて来たさうだ。」

こんな言葉が本部で交はされてゐたといふことは、後に聞いたのであつたが――。

青年俱樂部

その翌年であつた。先づ自身の希望でもあつたが、本部からもすゝめられて、私は上京し、正式に俱樂部に入つた。盛んな歓迎を受けた。歓迎といつたからとて、何も改まつたものではない。武骨な壯士たちが髻面を突き出して、「やア」「やア」と笑ひかけて取り巻いたゞけのことである。然しそのぶつきら棒な挨拶の中には同志的親愛とでもいふべきものが溢れてゐた。その潤達無碍の雰圍氣に取り巻かれて、私は大いに感激した。うれしかつた。

「――あなたが、添田さんでしたか。」

と、笑顔で迎へて呉れたおばさんがあつた。大兵肥満の女であつた。これは俱樂部の主人公たる伊藤安市氏の細君で、此の人がいつも私に送る印刷物を扱つてゐてくれたのであつた。壯士たちは皆此の細君を「おばさん」と呼んで敬慕してゐた。他に向つては虎の如き壯士たちも、體重十七貫五百の此の「おばさん」の前にはまるで猫よりも柔順な子供であつた。

その頃俱樂部は京橋區新富町一丁目九番地に在つた。作者の鬼石學人の久田佐一郎、醉郷學人の殿江浩をはじめとして、約三十人の壯士が居つた。鈴木市郎、白井某、宗某、富張某、江口源十郎、潮田節次、宮入清正、眞鹽勘三郎、野々田某、濱地某、北昇、久保田六丸、吉村吞洋、井戸鐸英、田村晋五郎、横田某、等々々。

其の他常に本部へ出入してゐた壯士では、中西三一郎、加藤貢、鈴木某、小谷天涯、三谷某、黒田某、大場菊次郎、赤江金十郎（景昭の弟）有村徳、津田某、澤田某、伊藤友治郎、小川某等、多數であつたが、これらは演歌をやつた者もあるが、多くは政治運動が主なるものであつた。

尙又、田中正造、高橋秀臣をはじめとして、氣骨のある政治家も出入りした。

其の頃は、壯士節演歌の讀賣の外に、猛烈な選挙運動も行つたのである。選挙の時は、必ず此の團體から多數の運動員が出た。其の運動が頗る有力なものであつたから、候補者らも此の團體の爲には莫大な運動費を投じたものであつた。

關新之助の運動もした。森久保作藏、板倉中の運動もした。星享の運動もした。勿論多く自由黨の爲に運動したのだ。

青年俱樂部員は、大部分演歌で街頭に立つたものだが、選挙の時は殆ど其の方へ出かけて行つてしまふものだから、歌の方は極めて少數になるといふ状態であつた。

私が仲間入りをした頃の一流の歌ひ手は、江口源十郎といふ新潟縣の男であつた。私は其の江口と組んで街頭に立つたので、頗る成績がよかつた。二人共に、「望青年」といふ歌が好きで、よくうたつた。愉快節である。

歳寒く松や柏の操は清く

亂れし世には忠臣の

歴史を繙き見るにつけ

責そ中々重からむ

多難の時こそ我人が

見よや亞米利加聯邦が

反きて茲に獨立の

如何なる狀況なりしぞや

惨酷無道を極めつゝ

顯る例し東西の

青年男兒が盡すべき

されば國家の貧弱や

奪ひ立つべき秋なるぞ

羈絆を受くる英吉利に

基礎を建てたる其時は

英の苛政は日に増して

悲愴の雲は四方に満ち

狂風吹いて凄しく
一呼の下に雲をなす
百折撓まず激戦し
獨立國の旗章をば
吹き靡かせて堂々と
唱へし凱歌ぞ勇まし、
英兵百萬長驅して
オルレアン孤城を取圍み
迫りし時に身を挺し
佛蘭西國を救ひ出し
魁偉の男兒にあらずして
斯る事蹟に鑑みて
固く鍛へて諸共に
愉快ぢや 愉快ぢや

ワシントン等の名將が
義兵は忽ち簇りて
遂に敵をば追ひ退けて
十三洲の朝風に
貧弱多難の其中に
或は佛英の戦ひに
佛の全土を蹂躪し
佛の亡滅且夕と
疊那危急の間より
偉功を建てし其人は
可憐き少女のジャンダーク
志想を石より鐵よりも
國家の爲にと盡すべし

(鬼石學人作)

かうしたゴツゴツした歌も、當時いゝ聲でうたへばどうやら歌らしく聞こえたのである。聲の出
盛る一刻を、我と我が聲に聞きほれたこともあるが、其の他のヤツツケロ節とか、無茶苦茶節等に
至つては、まるで喧嘩でもしてゐるやうなものであつた。節も何もあつたものではない。たゞ嘯鳴
るのだ。咆哮であつた。
條約改正の問題や、廢娼問題、選舉干渉のことなど、何れもその咆哮の「壯士節」にうたはれた
ものであつた。

愉快節 條約改正

一
徳川の幕政續きて三百餘年
泰平無事に慣れしより
上下優柔不斷にて
眠る嘉永の六年頃
相州浦賀に轟きて

世は文弱に流れつゝ
士氣は全く衰頽し
忽然一發砲聲の
驚き攪る春の夢

天下は鼎の沸く如く
鎖港攘夷の説と共
紛擾極まる其の内に
幕吏が井蛙の管見に
縮結びたる條約は
治外法權且は又
奪ひ去られて今日に
左はさりながら當時は
斯る失策是非なきも
日に月進む文明の
立憲政治の今日に
いとも無念の事ぞかし
期限は過ぎて二十年
いかに數へてありつるぞ
國を愛する血性の
悲憤の涙は雨霰

志士は東奔西走し
興る勤王倒幕論
儉安姑息を旨とする
米國領事ハルリスと
國家の大事を誤まりつ
關稅賦課の權利まで
患ひを貽すぞ遺憾なれ
彼我の事情の不明より
今や明治の照代となり
光り燦然輝ける
依然舊觀存するは
指を屈せば改正の
長き日子を國民は
思ふて茲に至りなば
日本男兒が双頬に
などか猶豫ふ同胞よ

勇み進んでもろともに
赤鬚奴に泡吹かせ
眞に吾人の大急務

愉快ぢや 愉快ぢや

二

條約の改正事業は最大急務
見るもそよだつ外交史
幾多の人が交送り
空しく紛々擾々の
今に改正なし得ざる
人心歸一せぬ故ぞ
名利や野心の其の爲に
國民全體一致して
丹心盡す愛國の
などか成らざる事あらん
己れを利する慾の爲

對等條約斷行し
多年の鬱憤晴らさんは

三十餘年の其間
改正數度手を出すも
間に中止し挫折して
原因をたゞせば皆一つ
國民的問題は
成し得るものには非ざるぞ
區々の私情を掃ひ捨て
精神込めて當りなば
黨派や主義の争ひや
眼くらんで百年の

大計誤まる者あらば
既に條約改正の
廢棄なし得る者なれば
條約締結なすべきに
勵行など、叫ぶとは
法權撤去や稅權の
小刀細工に成就べきか
正々堂々一步だも
皇國の爲に盡すこそ

愉快ぢや 愉快ぢや

三

躍起せ上國を愛する赤誠男兒
文明開化は何物ぞ
口に自由を唱ふるも
實行せざれば半錢の
居留地制度の其下は

是ぞ許さぬ國の賊
期限はとくに經過りつ
今ぞ爛漫對等の
得意顔して現約の
片腹痛き事なるぞ
回復事業は淺薄の
上下心を協せつゝ
譲らず退かず飽迄も
眞に吾人の大急務

博愛主義とは何事ぞ
文に平等畫くとも
價だになき空論ぞ
彼等が主義の試験石

我法令の達せざる
賭博賣淫詐偽術數
無頼の怪物集まるは
其他長崎獸姦の
煙稅事件を始めとし
ノルマントンの沈没や
恨みを吞んで逝きたりし
露らす術さへあらざるは
思へば無念や口惜しや
奮ひ興りて國の爲
輿論の旗をば靡かせて
一刀兩斷快然と
東洋獨立神州の
輝やかすべき條約を
愉快ぢや 愉快ぢや

弱身に食ひ込む寄生虫
道徳倫理も顧みぬ
多く皆此邊りぞや
醜聞騒ぎやフィリップが
遠くは紀州大島に
近くは軍艦千島號
我同胞の妄執を
治外法權ゆゑなりと
多情多血の同胞は
正理の劍を磨き上げ
日本刀の其下に
現條約を廢棄なし
御稜威を高く東天に
締結は吾人の大急務

(鬼石學人作)

ヤツツケロ節

條約の改正談判どうしたね

老猿伯の談判も

ヒョコ／＼飛び出す井の上の

引込思案の詭謀主義

それも首尾よくやり損ね

國別談判おツびらき

折からズドンと來島の

雲か霞ヶ關あたり

青き息をばホツと吐き

こいつもやつぱりおべつかの

江戸ツ子らしく威勢よく

やるかと思つた其處へまた

何やら魚が遊び出し

早く聞きたい後の沙汰

今更いふも愚痴なれど

せつかく出来そな折も折

蛙は向ふが見えぬゆゑ

おひげの掃除がまづいのか

ノコ／＼這ひ出す穴の熊

どうやら軍扇のあがりそな

爆裂弾に仰天し

取つて替りし甲斐もなく

女房はドイツか知らねども

主義で大事はつとまらぬ

剃刀氣質でドシ／＼と

和歌山あたりの海邊から

しんねりむつりやるそだが

一步も下らずやつてくれ

もしもいけない其の時は

海外萬里の果てまでも

なんと行こうぢやないかいな

盡せや盡せ國の爲

日本刀を掲げて

死ぬる覺悟で コラサノサ

盡さにや其の時 ヤツツケロ

(久田鬼石作)

此の中に、老猿伯とあるのは副島種臣、井の上の蛙は井上馨(聞太)、穴の熊は大隈重信、二十二年十月十八日、來島恒喜のために爆裂弾を投ぜられて右足を失つた。青き息とあるは青木周藏、夫人が獨逸人だつた。江戸ツ子氣質とあるは剃刀大臣とうたはれた榎本武揚、二十五年八月、第二次の伊藤内閣となつての外務は陸奥宗光で、以上が十八年から二十五年まで歴代外務大臣である。それをうたひ込んでの軟弱外交諷刺であつた。

さうはいふものゝ、一般國民も、條約改正問題を繞つて諸外國をひとくるめにして肚を立てゝはゐたが、同時に懼れてゐたものゝあつたことも争はれぬ事實ではあつた。その鬱憤が、赤髯奴、赤鬚奴、トンガリ鼻、碧眼奴、毛唐などゝなつて、外國人を罵る言葉が澤山生まれた。尤もその中で、毛唐といふのはさほどに悪意のこもつたものではない。寧ろ一種のユーモアがあつて、誰しもが外

人を一口に毛唐人と呼んでゐた。わけのわからないことを言ふ者があると、「なんだ此の毛唐人が」と言つたやうな、いはゞ會體の知れないものといふ意味であつた。國民にとつて、會體の知れないのが、外國人であつたのだ。

書生の天下

その頃の青年は、口角泡を飛ばしてよく天下國家を論じた。議論好きが多かつた。意氣熾なものがあつたが、然し漠然としてゐた。無暗にナポレオンの名やビスマルクを振りまわしたりして、望みが高いといへばいへるが、空想的で香氣であつた。書生風でさへあれば、書生さん書生さんと、何處へ行つても受けがよかつた。

書生の天下であつた。割合に皆眞面目ではあつた。

此の時代にはまだ成金は出しやばらず、社會主義もなく、勞働問題もなく、喫茶店もカフェーもなく、従つて女給もなく、活動も野球もなく、女事務員も女優もなく、職業婦人もなく、娘義太夫

が流行つたのも、ドーブル連が出来たのもその後だし、女學生の墮落、海老茶式部なども未だ生まれなかつたから、墮落書生も多く出来なかつたが、ゴロツキ書生はあつた。

娛樂といつても何もない。貸本屋から借りて来て讀む本も、東海散史の「佳人の奇遇」末廣鐵腸の「雪中梅」矢野龍溪の「經國美談」などいふところで、弦齋も浪六も、露伴も一葉女史も、蘆花の「不如歸」も、すつと後のことであつた。一にも食ひ氣二にも食ひ氣であつた。食ふといふところで、汁粉が二錢（今御膳汁粉など、上品に呼んでゐるものだ）駄汁粉（今の田舎汁粉といふもの）は一錢であつた。

甘藷は書生の羊羹と呼ばれてゐたほどで、冬になれば焼芋は皆食つたものだが、一錢で大きく切つたのが八つもあつたのだから、一人で二錢食ふものは豪傑だつた。當時の演歌に、「——懷爐と食事のさつま芋、僅か五厘ホーカイ」といふのがある。學資を止められて下宿を追ひ出され、俱樂部へ入つて來た書生で、一膳飯屋で食ふことも知らずに焼芋ばかり半月も食つてゐて下痢を起したなど、いふ話もあつた。

書生の食ふことも夥しかつたが、確に世の中も鷹揚に出來てゐた。例の萬八樓の大食會の噂など

が興がられ繰り返されてゐたのも此の頃だ。——その小手調べには先づ五郎八茶碗で山盛りの飯を五六杯食ふ。それが食へなければ競技？仲間へ入れないのだ。さてその上で、最中を百食つたとか、鮓を六十だとか、煎餅を百枚とか、饅頭を五十、八十、或は百とか記録を競つたりしたが、此の莫迦げた大食競べで命を落としたものもよくあつたさうだ。

何代目かの松井源水が、醬油を何合とか飲んで、勝負には勝つたが、あとでひどく苦しんだ。深夜七轉八倒となつたが、その最中にも獨樂の秘傳を弟子に授けてから死んだといふ話も聴かされた金山といふ旗本が、鹽三合骨めて即死し、「廓の一夜に千兩はさて安いもの、金山殿の千石は、鹽三合ととりかへた」と唄に残つたといふやうな話も、大食會の噂に絡んで聞かされたものだ。死ぬのはとも角病人はザラであつた。

遠山滿翁の大食も有名であつた。尤もこれは食ふてから吐いてしまふのである。吐くのことについて困つたのは餅ださうだ。餅は棒になつて出て來るので、中々難儀ださうである。此遠山さんに對象されたのが犬養さんだ。こつちは少食の方だ。「遠山さんの大食に木堂さんの少食」といふのがよく言はれた。その大食と少食の何れもが、健康長壽（木堂は殺されたから死んだが）だつたのを私は面白いと思つてゐる。

とに角その頃は、一般社會の、人心も、風俗も、今日と比べたら大きな相違はあるが、殊に學生（書生）といふものは、頗る蠻カラで、頭も單純なものであつた。

それにも増して壯士の方は、蠻カラで武骨で、肩をいからして反りかへつて太いステッキを振り廻しながら歩き廻つた。手織木綿の着物に太い白天竺の兵兒帯をぐるぐる巻いて、黒木綿の紋つきに定まつてゐた。それも五つ紋の大きいのだ。それに太い長い紐だ。短いので二尺、長いのは四尺五尺位のもあつた。それを結んで首へかけたものだ。

下駄は、書生も壯士も薩摩下駄、鼻緒は白の小倉で、これも太いのを自慢にした。

私は横須賀にゐる時既に、羽織の長いのに一とひろもある白い紐を用ゐてゐたが、横須賀にはそんな風俗をする者が他になかつたから、非常に人目を惹いたと見える。顔馴染の子守女などが、私のことを「一とひろさん」と仇名をつけてしまつた。やがて他の人達までみんな私を「一とひろさん」と呼ぶやうになつた。へんな仇名だ、——一とひろさん。

東京の書生は、その頃「蓬頭垢面、短褐弊袴」といふ奴で、汚い手拭を腰にぶら下げてゐた。壯

士の方はそれよりは幾分かシヤレてゐたが、マア、大同小異と言ふても差支へない程度のものであつたらう。そしてどちらも高々と詩を吟じたり、

書生々々と輕蔑するな

大臣參議も元書生 ヨサコイヨサコイ

と嗷鳴つて大道を濶歩するのであつた。

保安條例

私が青年俱樂部に入つてから三四年間は、仲間の大部分が武骨一片寧ろ粗暴でまつたく色氣なしであつた。口を開けば政治運動の動向、各縣に亘る選舉干渉についての藩閥攻撃であつた。政府のことを誰も政府とは言はず、「ハンバツ」「ハンバツ」と呼んでゐたのである。そして酒を飲めば劍舞したり、

三里以外へ放逐されて

巡查の警備も 乙なもの

どうせ一度は△△縣の

監獄住りも 身の覺悟

などと嗷鳴りまくるのであつた。皆天下の志士を自任してゐた。

保安條例の發布されたのは、第一次伊藤内閣（明治二十年）の時だ。天下の志士數百人を東京の三里外へ放逐した。此の新令に最初ひつかゝつたのが、星亨以下三十餘名の壯士であつた。

政府はこれを手はじめに、猛烈な抑壓政策を採つたため、民論は沸騰し、熱狂せる政客は愈々熱して官憲に至る處に衝突して騒然たるものがあつた。そのあぶれ壯士が流れ込んで來たのであるから、いや、俱樂部は賑かなものであつた。

これより先、福島縣令三島通庸の言語に絶する暴政に對抗して起つた、無名館（自由黨の政治結社）の「福島事件」で、河野盤洲（廣中）が東京の高等法院で八ヶ年の刑を言ひ渡されて、宮城縣の集治監へ囚はれの身となつた。

これを聞き傳へた全國の自由黨員は、一齊に藩閥政府の暴壓に血を沸かし、東京に自由黨の總會を開いて、これに對抗することになつたのであるが、然し、言論文章は極度に壓迫され、手も足も出せなかつた。

此の福島事件の起りは、明治十五年から十六年に亘つてゐる。十七年の加波山事件、秩父暴動等々相次いで小暴動も百姓一揆もあつた後であるが、憲法が發布されても、議會が開かれても、薩長藩閥政府の専制政治は持續し、猛烈な選挙干渉となり、選挙場裡は各縣に涉つて、民黨と吏黨とが火花を散らし、鎗を削つて物凄き状態であつた。

今日此の頃の人々に、たゞ選挙運動と言つてもわかりにくからう。選挙法改正以前のその又以前のことである。或は戦争の如く或は暴動の如き場面もあつたし、演説會場へまでもピストルをぶつ放す、命がけの運動であつたのだ。切り殺された運動員もあり、負傷者もあり、入獄者（金錢のためではなく）も多数にあつた。

私も數回參加した。勿論自由黨即ち民黨であつた。實に演歌の「無茶苦茶節」がよく當時の無茶苦茶な狀況を物語つてゐる。

無茶苦茶だ、亂暴だ、わからない

干渉だ、たまらない

見よや二月の總選挙

其他何れの選挙區も

殺氣滔々天を衝き

無頼の悪徒群りて

選挙場裡を踏みにじり

狼藉極まる振舞を

或は煽動はたそゝのかし

罪なき良民惱まして

殺伐野蠻の悪弊を

立憲政治の體面を

言論自由の今日に

干渉されてはたまらない

ホントニさうならわからない

熊本石川佐賀高知

民吏二黨の競争で

品川風の物凄く

白晝兇器を振り廻し

人家を壊し血を流し

知らぬ顔してすまし込み

正義の志士を苦しめつ

社會の秩序を紊亂し

醜みにくり出して昭代の

汚してお前はとうするえ

壓制されてはたまらない

これが生首政治かい

(久田鬼石作)

「品川風」とは干涉風、即ち品川彌次郎の選挙干涉を諷したもので、「生首政治」は當時の流行語になつてゐた。これは彌次郎が「此の首を賭けて誓ふ」と議會でも言つたし、むしろ口癖にしてゐたのに依るので。

さうだ、選挙騒ぎで思ひ出したが、壯士の中に大場菊次郎といふ古強者がゐたのを忘れてゐた。(これは長く俱樂部に出入りしてゐたし、話題もたんとある。老ひてますます元氣な男で、自分の過去を私にもよく語つた。)某氏の選挙當時であつた。

久田鬼石とたゞ二人、選挙事務所に留守をしてゐた時、反對黨の壯士多勢に押し寄せられて、あはや事務所もメチャメチャにされなん危急の場合であつた。大場菊次郎は久田を制して、たゞ一人、玄關先へ突つ立つて、大身の槍を上げて大音に、

「來い、片ツ端からデンガク刺しだ！」

と呶鳴つてトンと石づきを鳴らした身の構へ、眼光の鋭さに、敵は怖れをなして退却し、事なきを得たが、其の形相は物凄かつた、と久田鬼石度々の語り草であつた。

其の他前掲に洩らした神田に劍術道場を持つてゐた津田官次郎(俗にホラ官)辻村(曾て車界黨

を起した仲間)等々の猛者の揃ひであつた。とに角當時の選挙騒ぎは、つい先頃のやうな「コソコソした選挙違反」などいふケチなものとはまるで違つた眞剣なもので、地方では鉢巻禪で山道や畑中で抜刀で民黨吏黨が斬り合つたやうなこともザラにあつた。情勢も違へば、人間の意氣も違つてゐたのだ。

選挙の時は、俱樂部員の全部が出て未だ人が足りないことがあつた。そんな場合は他の各所に散在する壯士の團體から人員を召集したのである。又或る時は他の團體から口のかゝつて來たこともあつた。そんな風であつたから、選挙の時は、歌の讀賣は殆ど中止のかたちになるのであつた。その頃、浦鹽歸りの女壯士(賣春もしたと告白せる)が、青年俱樂部へやつて來て、向ふへ行つてゐる日本の女たちに依つてしきりにうたはれてゐるといふ「ウラジホ節」なるものを傳授して行つた。大陸と女の問題について私たちは考へさせられた。そして早速これを演歌した。

日本の親さん起きてか寝てか

思ひ出してか 忘れてか

「焼野の雉子夜の鶴とは子を思ふ親心だが、その親を思ふ子の心も又決してそれに劣るものではない。子を思ひ親を思ふは即ち國を思ふの情である。此のウラジホ節を以て、徒らに悲痛な歌と稱し哀音の調とは呼ばれないのだ。決して女々しいたゞの望郷の唄ではないぞ。その半面には男々しい愛國の情が含まれてゐるのだ。此の可憐なる婦女は寧ろ勇婦である、烈婦である。纖弱なる身を以て、嚴寒未開の北滿洲、乃至シベリヤ地方深く入り込んで、所謂夕に吳客を迎へ旦に越人を送る憂き生活を堪へ忍んでゐるのは、何の目的であるか、

オロシヤ恐ろシマンザは臭し

意氣な日本人に 金が無い

その金を得んがためである。假令その茲に到る初めは、或は欺かれたものもあらう。されど既にあるその運命を、一轉して利用せんとする、その意氣や壯なりとすべきである。握り罌丸で搖錢樹を探し歩き、目的が外るれば落膽失望して他人様のお助けを仰がうとするやうな、意氣地なしの野郎輩の達く及ばぬところである。」

と言つたやうな説明をつけて、盛んにうたつたものであつた。

尙これは私が俱樂部に入る前のことで、私はその印制物を見たゞけであつたが、既に廢娼問題があつた。島田三郎が、同じ基督教徒であり當時下院の議長であつた中島信行と語らつて廢娼運動をはじめたのだ。その爲に三多摩壯士も出動して騒いだのだが、演歌ヤツツケロ節に、「廢娼の論に賛成やゝ多く、一府十三縣、募りに應じて二千餘の、壯士が運動するさうな、私とお前の中島も、これから縁をキリストの、教を奉ずる身なれども、ヤツパリめにつく島田まげ、赤いしかけをぬがせても、くろいおこなひどうするえ（中略）新奇をよろこぶ人心、幸ひお前の論がたち、一時廢娼するとても、あめふり天氣ぢやなけれども、かさとかさとはなをつき、終にはどうしよう公娼と後悔するのはしれた事、コラサノサ、およしよおよし廢娼論、ヨサナキヤ其時ヤツツケロ」といふのがあつた。

とに角一時廢娼存娼の論戦力戦がわつとばかり起り、線香花火的に立ち消えにはなつたが、これが後年の此の問題の口火を切つたものであつた。書籍行商社から「存娼廢娼大議論の顛末」といふ冊子（菊判八頁）も散亂した。

壯士・讀賣

青年俱樂部員の内には、政治運動のみやり通すものと、歌の讀賣を以て立つものとの二派あることは前にも述べた。

私は次第に歌で通す決心をして、選挙の時でも少数の讀賣派と共に、俱樂部に立て籠るやうになつた。私は騒然たる周囲の中でやうやく演歌の眞の「生命」を見出だしたやうな氣がしたのだ。

殿江醉郷は、歌の作者でもあり、壯士の親方でもあつた。選挙のない時は、金がなかつた。度々來訪者をカモと稱し、酒を買はして飲んだことなどがあつた。同氏の日記に、

「今日、甚だ不漁、夜に入つてから添田君の奮發で『白馬』に跨つて歸る。」

とあつたのを私は時々思ひ出すが、よく飲む人であつた。白馬とは濁り酒、どぶろくのことなのである。(殿江氏は後年、上州新報の主筆として招聘され、前橋市に住み、二十五年勤続して「電通」で表彰されたりしたが、其の後も十餘年勤続して、一昨年亡くなり、長男の世になつてゐる。)

人間の氣づかぬ間にも、世は移り變つて行く。

私たちが眞面目くさつて演歌したり、憤慨したり、うかうか(といふより仕方があるまい)暮らしてゐる間に、政界といふものゝ本流が怪しく濁りを見せて來た。

「薩長藩閥政府の軍門に降つて醜を千載に残す勿れ」と叫び、相戒めて、肩をいからして威張つてゐた仲間の中からも、節操を賣つて服裝を飾るものが出るやうになつた。

時の大臣の中に、「議員操縦係」があつたり、「議員争奪」のゴタスタ騒ぎがあつたり、盛んに「議員買収」が行はれたり、だん／＼と其の事實も明白になり、政界上層部の墮落は次第に末派の壯士の仲間にも及んで來た。

人はこれを「醜類」と稱した。腐敗に腐敗を重ね、醜の醜なることが行はれた。

これを見せつけられた私は、心から政治運動にアイツがつきた。殿江君曰く、

「議員と娼妓とが同格になつて來たわい、身を賣り節操を賣つて、しやあ／＼してゐる。」

然し俱樂部のものには、幸か不幸か、まだ骨があつた。

社會改良主義に傾いて、獨立自由の立場で存続した。街頭演歌の外に、政談演説會を催し、「奸商

征伐」や「社會腐敗の原因」など、いふ演題で、政治道德を論じ、社會改良、士氣の振興を唱へてゐた。下足料（五錢）を取るのをこれを私たちはゲン演説と言つてゐた。

歌の方でも「買收議〇が何十頭、一頭幾らと値を決めて」など、政界諷刺や、山師會社、紳士社會の弄花流行などをやつつけた社會の穴さがしをしてゐる中に、演歌者に豊年がめぐつて來た。

沈滞せる空氣をふるはした、驚天動地ともいふべき福島中佐（後の大將）の單騎遠征と、郡司大尉の短艇遠征とがそれだ。

俱樂部では久田鬼石が早速此の作歌をした。曲節は從來の愉快節で、既に洗練された咽喉である。歌詞さへ覺えたらすぐ街頭へ立てる。又暗誦してしまはなくても、街燈の下で歌本を見ながらでもいゝのだから、簡易なことだ。

純正俱樂部員ではないが、小川國臣氏が本郷赤門通りで、街頭の光でこれを見ながらうたつてゐたら、忽ち黒山の人だかりがしたと言つて逃げて歸つたといふ滑稽談まで生んだ。

うたつて人を集めて置いて、これぞと思ふ中心の歌を聴かせて感動を與へてから、買ひたくなるやうにするのが讀賣である。「流し」といふ方法もあるが、街頭に立つた場合には、最初何なり捨て

鐘のやうにうたつて人を集めるのだ。それを「小川さんは人が集つて來たからキマリが悪くなつて逃げて來た」と皆大笑ひ、後々までの話題を残した。

小川氏は當時三十七八歳の美しい八字髭を生やした、いつもきちんと袴をつけてゐた紳士風の男で、歌は何をうたつても上手であつたが、遂に本統の讀賣はしなかつた。小島（千葉縣人）といふ男は小金を持つて入會したのだが、早速福島中佐を二三日で節も文句も覺え込んで、毎夜賣りに出てゐた。そして私たちよりも誰よりも一番多く持つて出た歌本を、一部残らず賣つて、早く歸ることが五六日続いた。人は皆皆不思議に思つてゐた。天才の出現だとも思つた。ところがある夜、仲間が萬世橋を渡らうとする時、橋の上から何やらバラ／＼バラ／＼川へ投げてゐる者があつた。何氣なく、すかして其の男の横顔を見たら、それが小島君であつたと報告した。間もなく金もなくなつたと見えて、ほんとに讀賣をやりはしたが、上手といふほどにはならなかつた。たゞ負惜しみの強い男であつた。（後、芝區にあつた赤誠館といふ壯士の群に入つてから二度ばかり顔を見せたが、其の後は知らず）演歌も、決して單なる物好きや、上の空では出來ることではなかつた。眞劍に打ち込まなければ駄目であつた。

福島中佐の歌は非常な賣れ行きであつた。「歸朝の歌」は更によく賣れた。(さういふ勢ひに便乗したゞけの演歌者は、その時は同じ恰好をして通つてゐるが、これが必ずしも本物の演歌者とはいへなかつた。)

私の相棒は相變らず江口であつたが、江口は頗る酒好きであつて、人は皆「江ン平」と呼んでゐた。「呑ン平」と江口の江を加合したのである。

福島中佐がよく賣れるので、ホクホク喜んでゐた。演歌に出た歸りには、飲食店に寄つて夜食をするのだが、彼は飯は食はず、たゞ酒ばかり飲むのが例になつてゐた。私の食事が済んでもまだ銚子を放さず、ビョコビョコ頭を下げて私の顔を見ては、「すまん、すまん」と詫びること、必ず五六回に及んだ。私は其の頃は一滴の酒も飲まなかつた。

其の頃の書生といへば、三田の慶應に神田が法學院の法學生、本郷の済生學舎の醫學生とであつた。済生學舎のくづれが三人俱樂部にゐた。皆放蕩のために學費を絶たれた結果、下宿屋を出されて俱樂部へ入つて來るといふ順序であつた。その中の近藤(今は東海道の何驛かで開業して相當な醫者になつてゐると風の便りに聞いてゐるが)とも私は組んで出たことがある。歌の方は私が先輩

株で指導したのであるが、遊蕩の方では彼が先輩で、誘導されて遂に花柳の巷に足を入れることを覺えた。彼は三重縣の豪家の次男で、済生學舎の前期の免狀は持つてゐるが、後期の試験(開業免狀とも言つた)を受ける金を取り寄せてはそれを吉原の遊蕩學舎へ運んでゐた爲に遂に父兄に見離されたのである。演歌は一流の組になれるほどの歌手であつた。——こんなことを言つてゐては果てしがない、中止だ。とにかく此の時は、演歌讀賣専門の俱樂部員が殖えて、榮えた。

福島中佐と郡司大尉

單騎遠征に對しては、世間一般の人氣といふものが、歌詞にも現れてゐるやうに、熱狂的であつた。大人、小人、女、商店の番頭小僧に至るまで、「見よや見よ福島中佐の絶大偉業」といふ冒頭の句が口癖になつてゐたが、どういふものか郡司大尉の歌は、それまでの人氣とならなかつたのは、尠く共歌の方では福島中佐の方に勢ひを先んじられた感があるのと、その事業の方向が如何にも地味であつたせゐらう。その出發にあつては、壯圖歡送に墨堤を埋めたことも、單に人衆の物

見高さが勝つてゐたのだらうといふことは、千鳥移住後の消息については永くこれを全く忘れ去つたかのやうであつたのを考へてもわかるのだ。その迂鈍白眼の中で敢然所信に就いた郡司大尉の鐵の意志と熱情こそ、忘れぬものだ。

單騎遠征の歌（愉快節）

見よや見よ福島中佐の絶大偉業

日本帝國軍人の

擔ひて立ちし安正が

歐亞萬里の大陸を

跨る駒の勇ましく

伯林都城を震動す

蒙古を過ぎて西比利西^{ウイベリヤ}

露帝の賜ひし謁見や

前途の多難を思ひなば

重き名譽を一身に

人の踏みにし跡もなき

探檢せんとたと^{ひより}單身

威風眩き首途は

獨逸を出で、^{ムロシヤ}に入り

征路遙かに雲漢々

武官淑女の厚遇も

胸に百感躍るらん

されど一度盟ひたる

石をも徹す桑の弓

などか屈せん撓むべき

飛雪紛々骨を刺す

人煙稀に道絶えて

聲物凄き夜の旅

烏拉山頭馬を立て

自ら高きに誇りたる

亂れたる世に功名を

波も動かぬ大御代に

普く世人に讚美され

香はしき名を海外に

何時の世までも朽ちざらん

愉快ぢや 愉快ぢや

日本男兒の決心は

たとへ屍を曝すとも

朔風凜烈砂を捲き

強き寒氣も厭ひなく

谷間に吼ゆる猛獸の

峻坂砂漠を打越して

歐亞二洲を睥睨し

勇氣豪膽斗の如し

建つる例は多けれど

昔を凌ぐ豪傑と

國旗の光り色添へて

輝したる功績は

（久田鬼石作）

明治二十六年二月十一日、中佐は伯林から愛馬ガイセンに跨つてロシアへ、そしてシベリアの曠野を横断したのだ。途、ガイセンがボルジノ村で斃れたので、更めて馬を求めてウラルと名づけ、旅を続けた。其の歸朝を待ち受けて、民衆は熱狂的歓迎をした。

今や功成り満肩に

歸る中佐を待ち受けて

東京市街を始めとし

喝采拍手の歓迎と

捧げし名譽の冠は

五大洲裡に輝かん

榮譽の花を荷ひつゝ

長崎神戸横濱や

四千餘萬の國人が

赤心こめし宴會に

揚る花火の音高く

とあるやうに、それはそれは氣ちがひのやうであつた。

そして此の歌が如何に流行したかといふことは、朝日新聞が擴張運動に此の歌の力を利用したことも窺ふことが出来る。

見よや見よ東京朝日の絶大勉強

日本帝國新聞の

擔ふて立ちし社員等が

重き任務を双肩に

他社に先立つ報道や云々

と語呂を合せて作り替へたものを印刷して、十二三人を一隊とした社の印絆纏を着たのは多分賣捌所の配達と賣子であつたらう。これを引き連れた隊長は、金ピカの錦刺の上衣、帽子を着けて指揮してゐた。そして町の角々で、往來に向つて一列に並んで此の歌をうたつてからピラを撒布するのであつた。

私は當時つまらんことのやうに思つてゐたが、今から考へると、新聞社經營上の機敏な商略であつたのだ。

村山龍平氏が大阪で舊宇和島藩の倉屋敷跡を安く買つて新聞事業をはじめ（今では堂々たる目抜の場所になつたが）明治十七年か、十九年から東京にも特派員を置いてゐた。それが、二十一年か「めざまし新聞」を買収して、東京朝日新聞と命名して、東京朝日、大阪朝日兩社の經營が始まつたのだが、東京朝日發刊の當日には、東都にたゞ一つの交通機關、鐵道馬車を買ひ切つて、これを開

放し、無賃乗車としたのが大評判であつたが、それが又大きな宣傳になつたことは言ふまでもない。
(その頃宣傳といふ言葉はなかつた、「廣告」だ)すると東京の十八新聞が團結して、東京朝日の進出を阻んだ。朝日を賣る者には新聞をやらなと言ひ出し、關東の賣捌店が東京に集つてゴタゴタし、「朝日と同時に他の新聞を賣つてはならぬ」など、長くもめてゐた、その争ひがやうやうケリがついた頃だと思ふ、「見よや見よ」は。まだ朝日が株式組織に成らなかつたか、或はなつてゐたか、そんな事業上の知識は其の頃には全々なかつたのである。今になつて事業家のやり口に感心してゐるやうなわけだ。

端艇遠征歌 (愉快節)

軍人が國に盡せる名譽の鑑

郡司大尉を始めとし

賢き邊りの恩賜に

遠き千島の占守へ

言問岡の岸邊より

報效義會の人々が

勇氣も一層加はりて

移住の壯圖も緒に就きて

纒解きし其の時に

晴の首途を送らんと

樂かん計りの人の山

拍手の音と萬歳を

天地も崩れん有様ぞ

津々浦々に舟寄せて

盡せる有志の響應に

四方に立隨む朝霧や

狂瀾怒濤の荒波も

櫂操り悠々と

如何なる策をや藏すらん

銃や劍にひきかへて

變る氣候の厭ひなく

北門鎖鑰を固めんと

實にや皇國の干城ぞ

大尉の勇氣を模範とし

我日の本の權勢は

墨陀十里の長堤も

廣き川面に鳴り響く

唱へて祝ふ喚聲は

横須賀浦賀館山や

調度を急ぐ東の間も

重き名譽を荷ひつゝ

東西も分ぬ眞の闇

木の葉にひとしき端艇に

進む武夫の胸中は

やがて千島に着きぬれば

慣れぬ鋤鋏携へつ

不毛の山野を開拓し

務むる大尉の眞心は

四千餘萬の同胞が

國家の事業に盡しなば

歐米諸洲を凌ぐらん

故郷大磯の變貌

熱するものはサメる、流行るものはスタる。さしも盛んに流行した福島中佐の歌も、下火になつて来た。歌が賣れなければ、演歌者は皆不景氣だ。元氣節とか天籟節とか小唄もあつたが、それらは演歌の主體ではなかつたし、「日清談判破裂して、品川乗り出すあづま艦」や大井憲太郎等の國事犯事件の歌は、壯士芝居の若宮萬次郎が舞臺でうたつて踊つた劍舞の歌で、酒宴の席で用ゐられるくらのものだ。どうしても私たちには愉快節と欣舞節の新歌詞が必要なのであつた。

最高調に達した政治熱は漸く下火にはなつたが、まだ口先の政治論だけは續いてゐた。それと連れて政界の重要問題や内閣の更迭、議會の事などは次々に演歌の材料には成つてゐたが、さほど振はなかつた。

かゝる内に、金玉均は上海で殺され、朝鮮には東學黨の亂が起こるなどあつて、日清戦争の氣運は刻々に迫つてゐたのだ。

私は北陸への旅を思ひ立つてゐた。その矢先へ、郷里から突然相談があるから来て呉れといふ手紙が来た。何事であらうかと思ひながら、すぐに歸郷した。

忘れ勝ちでゐた郷里大磯の町は、見違へるほど開けてゐた。歩いて出た郷里の町へ、今度は汽車で横づけであつた。まだ單線ではあつたが東海道線が通じてゐたのである。線路の敷設については私の村からも工夫になつて出た者があり、中には工事の進行に連れて何處までも行つてしまつた者もあるといふ。

海水浴は早くから出来てゐたのだが、別荘といふものはやりもののやうに澤山出来て、まだまだ幾らでも殖えようといふ形勢が見えた。私たちが學校へ通ふ時分に登つて遊んだ愛宕山は半分以上切り崩され、愛宕神社は下へ下ろされ、其の跡へ安田善次郎の別荘が出来たり、外人の別荘も出来てゐる。大磯は「別荘」に全然占領されてゐるのだ。

西小磯に隣接した東小磯の松林の中には、時の總理、伊藤博文伯(後、侯爵)の滄浪閣があり、

政治家達の往来が頻繁になつてゐたことなどは、私にはまったく隔世の感といふ奴であつた。

父兄からの相談といふのは、私のすぐの弟が、小田原の呉服屋に勤めてゐたのをやめて、獨立して呉服屋を創めるについて出資してくれといふので、其の出資の可否を決するためであつた。爐を圍んで皆家族が集つてゐた。所謂家族會議といふのであつた。

私の實家は中農であつた。手一杯に生活するには充分であつたが、農家に金は敵、現金といふものはないし、殊に其の時代としては尙更重大な事柄である。弟は、今の出資は幾倍にしても容易に返せる、必ず返すと主張してゐる。兄は悩み、父は中立といふ風であつた。

元來弟は小才のあるところへ、更に商人の掛引と口前とを持つてゐたのだから、慈愛に富んだ善良な父と、純な賢兄をまるめる位のことには赤子の手をねじるより易いことであり、且つ既にその基礎工作の済んだ、いはゞ後の祭であることが私には見え透いてゐたから、「出資は同意して置きます。但し財産を分けてやるのだといふ心持で、未練を残さずに出してやること。若しあとで經營難とか失敗とかの場合があつても、斷じて追加はすべからず。」と進言して、固く念を押した。一同も得心して、めでたく解決した。

他日實家の傾く運命、それには、没落まで十六七年間の波瀾曲折があり、其の處理奔走の事があり、次いで父の死亡、一家離散の状態は、こゝでは語り盡せないが、爐邊會議での私の陳べた苦言は用ゐられなかつたことは勿論であつた。それは私にしては忘れ兼ねるものである。

「本郷の南の家」と呼ばれて幾代も續いて來た家、屋敷、椎、栗、鶯、椿の大樹に圍まれた庭の廣い家、横面から裏へかけ深い濠をめぐらして、竹藪、筍も出る、季節々々の果實の樂しかつた子供時代が懐しい。これが人手に渡り、伐りくづされ、全部畑にされた跡を見て、郷里の人たちが「本郷の地形が變つてしまつた」と言ふのを聞く度に、兄は口惜しがるのであつた。

弟への出資の追加々々で、田地も山も書き入れ、最後の屋敷に及ぶ負債の苦勞は一通りの事ではなかつたとそれを言ふよりも、こゝは簡単に弟の飲んだくれが實家を飲みつぶしたといふ方が早い。私は東京へ引返して、北陸の旅に出かけた。

日清戦争

北陸への一人旅は、苦難が多かつた。(道中談は幾らもあるがしてゐられない。)越後の荒井と高田では、好景氣で息がつけた。

越前福井へ入つた頃、日清間の風雲が愈々強くなつて、人は皆口を極めて支那を罵り、豚尾漢とかチャン／＼坊主、慈姑頭などと言つてゐた。

宿を定めて其の夜町の目抜き場所を選んで演歌をはじめると、忽ち群集に囲まれた。得意になつてうたつた其の時の歌は、鬼石學人の欣舞節「干城」外數種であつた。

金鳥は西に傾きて

營所に聞ゆる號令の

響き渡りて嚴めしく

下に集へる武士が

夏は撲たれて汗に惱む

いかに過ごさせ玉ふらん

泳ぐに鱧なき網の魚

晚霞は鎖す城内の

喇叭の聲は肅々と

條規正しき軍律の

冬は撲たれて雪に泣き

故園にまします兩親は

飛ぶに翼なき籠の鳥

拜む寫眞に圓月

待たれよ暫し待てしばし

我が大君の御爲に

日本刀に村田銃

聯隊旗をば前に立ち

清國兵を斬り倒し

偉功を砲煙の中に立て

金鶏の勳章胸にさげ

拍手の内に歸らなん

欣舞 々々 愉快 々々

今ぞ勤むる國の爲

捨つる命は惜むべき

鍛へに鍛へし五尺の男兒

降り来る彈丸飛び越えて

四百餘州を蹂躪り

アラビヤ駒に跨りて

意氣揚々と歡迎の

故郷の錦ぞ勇まし

(久田鬼石作)

歌の前説明や結末の辭は、演歌には必ず附隨するのであるが、其の夜の説明の時、群集の中に「支那は弱い、日本人一人で十人位蹴飛ばせる」と叫んだ者があつたので、「大敵とても恐るゝな、弱敵とても侮るなといふことがある。侮るといふことはよくない」と私がいふと、忽ち、支那の最良をする、支那の廻し者だと野次りはじめた者があつた。それへ後から加はつた群衆が加勢して大

騒ぎになつた。私は將に袋叩きにされんばかりに成つたところへ巡查が割り込んで来て、群集を制したが制し切れず、私を警察へ連れて行くことになつたが、群集は尙警察までゾロゾロ隨いて來るといふ始末であつた。

一時間後にやう／＼群集は散つたが、まだ危険だからとて巡查が保護して宿へ送り込んで呉れた。私はこんなわからず屋の多い土地はないと思つたが、人の氣が支那問題で昂ぶつてゐた爲であらうし、日本の國民性のあらはれたといふ氣がした。

早朝、福井を捨てた。

東京へ歸ると間もなく戦争は始まつた。

豊島沖の衝突、黄海の海戦、安城渡と、連戦連勝の勢ひで、新聞は賣れる、號外は飛ぶ。エライ景氣でチリン／＼と鈴音も勇ましく、吉原の妓樓では新聞配達に御祝儀を出したりした。喇叭卒白神源次郎、松崎大尉、阪元赤城艦長などが眞ッ先に有名になつた。

開戦の歌（愉快節）

仁愛と義侠に富みたる我が帝國が

隣邦朝鮮みちびきつ

全ふせしめて永遠に

盡すにかへて清國は

屬邦なりと云ひふらし

隣交破る暴戻を

大詔渙發ありしより

無念を忍びし國民の

疾風枯草を捲く如く（略）

獨立國の體面を

東洋平和を維持せんと

尊大不遜朝鮮を

陰に奸策行ひて

賣させたまふ宣戰を

悲憤扼腕切齒して

士氣は振ふてさながらに

（久田鬼石作）

これに續いて、「摩天嶺」「平壤大勝」「黄海大捷」「九連城」「李鴻章」「威海衛」「松崎大尉」「志摩大尉」「原田重吉」「朴泳孝」「丁汝昌」「海上の花」又捕虜となつて殺された鐘崎、山崎、藤崎の「三偉人」等々が順次に出來てうたはれた。これを列記すれば日清戦争の狀況が髣髴とするのだが、その追がない。



明治中期の壯士演歌本

原田重吉を一つ抜いてをかう。後年には爆弾三勇士など現れて名を止めてゐるが、玄武門の原田重吉の勇躍振りは、如何にも明治色のものである。これは石版畫にもなつた。さう云へば戦中は店頭石版畫が氾濫した。博文館は「日清戦争實記」を出刊した。

原田重吉 (欣舞節)

過ぐる平壤の戦ひに
破竹の勢ひ凄まじく
登りて彼方を敵下ろせば
逸やる勇士の突貫も
屍は積んで山をなし
進み兼ねたる一刹那
躍り出でたる一勇士
下を潜りて城壁を
ヒラリと飛び込む其人は
續いて三村小隊長

元山朔寧兩枝隊
進み乗つ取る牡丹臺
要害堅固の玄武門
空しく敵丸の的となり
退く心はあらねども
味方の内より奮然と
雨より繁き彈丸の
猿猴の如くに攀ち登り
これぞ原田の重吉氏
死を決めたる奮闘に

明治廿七年十二月七日印刷
 明治廿七年十一月十日發行
 陸海軍省檢閲許可
 東京市京橋區京橋一丁目九番地
 發行所 中央青年
 鬼石學人新作
 支那大和魂 全
 中央青年俱樂部

鬼石學人新作
 日本浪速通華上
 不知山人感作
 あづま童
 藍俱樂部
 鬼石學人新作
 日本魂
 東京中央青年俱樂部

明治中期の壯士演歌本

原田重吉を一つ抜いてをかう。後年には爆弾三勇士など現れて名を止めてゐるが、玄武門の原田重吉の勇躍振りは、如何にも明治色のものである。これは石版畫にもなつた。さう云へば戦中は店頭石版畫が氾濫した。博文館は「日清戦争實記」を出刊した。

原田重吉（欣舞節）

過ぐる平壤の戦ひに
 破竹の勢ひ凄まじく
 登りて彼方を瞰下ろせば
 逸やる勇士の突貫も
 屍は積んで山をなし
 進み兼ねたる一刹那
 躍り出でたる一勇士
 下を潜りて城壁を
 ヒラリと飛び込む其人は
 續いて三村小隊長

元山朔寧兩枝隊
 進み乗つ取る牡丹臺
 要害堅固の玄武門
 空しく敵丸の的となり
 退く心はあらねども
 味方の内より奮然と
 雨より紫き彈丸の
 猿猴の如くに攀ち登り
 これぞ原田の重吉氏
 死を決めたる奮闘に

打ち惱まされし敵兵が

城門颯と推し開けて

平壤爲めに陥りし

實に干城の名に恥ぢぬ

譽れは子孫に残るべし

浮足立つたる其の際に

我が軍隊をさしまねき

古今無双の働らきは

武士の龜鑑と芳ばしき

欣舞 々々 々々 愉快 々々

(久田鬼石作)

私はこれらの歌を携へて、横須賀へ行つた。軍港横須賀が戦争で活氣を呈してゐたことはいふまでもあるまい。

私にとつては憶ひ出の多い横須賀の、しかも此の壯士節をはじめ聴いた、忘れられない大瀧町の賑かな通りに立つた。そしてうたつた。わき立つやうな受け方であつた。歌本は飛ぶやうに賣れた。その時、少し離れたところでヨ―ホホイといふ名古屋甚句をやつてゐる者があつた。(立川といふ夫婦づれで、これが名古屋甚句を讀賣式にやつた元祖であつた。後に淺草で親分になつた。)離れ

てゐて、ヨーホホイといふ聲がやうやく聞こえて来る位であつたが、それが宛もこちらに對抗するやうに、いつまでもやつてゐた。ヨーホホイがそんなに受ける筈もなかつたが、その頃女連れで街頭に立つなどいふことは珍しいことであつた。それがこちらの黒山のやうな人氣に、おのづから對抗意識が生じたのかも知れぬ。何時まで経つても止めないのだ。こちらはそんなにいつまでやる氣は元よりなかつたのだが、向ふの様子を見ると、やつぱり先には止められないやうな氣がして來て、つゞけてやつてゐた。到頭十二時過ぎになつて、漸く向ふが止めて歸つたので、こちらもすぐ止めた。其の時の賣上げが、一部二錢づゝで、十四圓幾らとあつたのを覚えてゐる。

後に、私の弟子の高橋須磨男が、淺草で此の立川のゲソをつけた(乾兒になること)ことなども妙な因縁であつた。

演歌の外にも、勿論色々戦争の流行歌があつたが、その多くは、それまであつたものゝ作替であつた。

減茶々々節

日本の大島公使はよつほどゑらい人

國家の爲に盡さんチウて

支那の公使はめつちやめちや

チャ／＼ラカチャンデハチャ／＼ラカチャン

○

支那のお臺場はよつほど下手な出來

大砲一發あたらんチウて

何處のかためもめつちやめちや

チャ／＼ラカチャンデハチャ／＼ラカチャン

改良節

大島公使は手ぬるくない

朝鮮獨立間違ひない

井上公使はじよさいがない

ジツホンマニチガヒハナイ

カイリヨウシナケリヤイケナイヨ　カイリヨウセク

○
デットリングに資格がない

日本は少しもとりあはない

すごく歸りしざまはない

ジツホンマニチガヒハナイ

カイリヨウシナケリヤイケナイヨ　カイリヨウセク

連戦連敗、兵軍の疲弊。支那は二十八年二月に至つて、張蔭桓、邵友濂に獨法學者デットリングを顧問として、これを乞降使としたが、これには使節の資格缺くところあり、神戸から歸されて、李鴻章が出向いて來た。そして馬關で小山六之助の爲に打たれた。その爲に談判に一時支障を來たしたが、結局あの春帆樓の媾和談判に依つて、二億兩の償金と臺灣、澎湖列島、遼東半島の割讓を得ることになつた。しかし、露獨佛三國の、所謂聯合勸告なる干渉で、止むなく遼東半島を支那に還附することゝなつた。

漢々節

ヒマラヤの峰に旭の旗輝けば

英露獨佛雲漢々

聯合勸告けれども

遼東還附を思ひ出しや

慷慨悲憤に雲漢々

日本刀に村田銃

進撃突貫五大洲

一時に亡ぼす夢を見た

霹靂一聲夢醒めりや

月は朧に雲漢々

(久田鬼石作)

「媾和談判」「小山六之助」「臺灣」「蠻賊蜂起」「櫻井輪送隊」等々の愉快節、欣舞節がうたはれ、「突貫武士」「天籟節」「改良元氣」などが流行した。「戦後の經營」の歌も出來た。

四月十三日、北白川宮殿下、大總督として、臺灣征討に御進發となつた。春雨の中を、威海丸は宇品を解纜した。

臺灣は十月に至つて略平定したが、總督の宮北白川能久親王は任地にて薨去あらせられた、嗚呼。

天 籟 節

東亞の波瀾もうれしや濟みて

パチユテンライヤン

建つる臺灣日の御旗

メンメトエーストリンタン

テケシユツトン チョイトユケホイ

丸鬘こわして東髪結ふて

パチユテンライヤン

看護婦するの國の爲

メンメトエーストリンタン

テケシユツトン チョイトユケホイ

(不知山人作)

突 貫 武 士

日本男兒が國のため

立てよ興れよ正義の軍

雲間遙かに眺むれば

虎伏すあたりに集る豚尾漢

行こうか乗り出す軍艦

波のまに／＼漕ぎ行けば

牙山破れて大同江

命から／＼城を捨て

戦く尾花にビツクリ豚尾漢

支ふ力もなき九連城

捨てゝ逃れて奉天府

北京城に泣き出す豚尾漢

あゝ、突貫せ、突貫せえ

(不知山人作)

元 氣 節

東洋の大勢熱ら見れば
うかとかうしちや ホンマニマタ むられない
七寸の草鞋踏みしめて
歐亜跋渉して絶大の
偉業を立てたら ナントマタ 愉快なる
これぞマー 壯快な チョイト快男子

(浮世三郎作)

戦後の腐敗

戦時はやゝ緊張してゐた政界が、戦後は安逸の裡に再び腐敗の極に達し、國民は倦み、奸商は暗躍する、山師、詐偽的な會社が簇出する。かうした社會情勢は私達を憤慨せしめた。横江が「とかく當時は萬事現ナマ〜」といふ歌を作りかけて止めたが、現ナマ現ナマは一般社會の流行語になつた。殿江が戦後の經營に就いて慨嘆したのが次の欣舞節であつた。

元 動

支那の戦争に打ち勝ちし
勇武は揚る喜びに
重き負擔も國民が
二十年來板垣と
今は提携約なりて
昔聞きたる渡邊の
斬るに斬られぬ政府自由黨が中よ
戦後の經營あやまたず
音に聞えし高島や
基礎に立てたる堅固な政府
一六勝負のさい園寺
目を振り出して手際よく
荒れに荒れたる躍起の運動
主義かはつた人々が

榎本ならぬ日の本の
酒と煙草の増税や
いとう心は更になく
なりて隔てし官民も
互に心も陸奥まじく
綱が鋭き名劍も

政治もいと芳川と
千古も動かぬ大山の
嘘か實か知らねども
さいごうの一戦幸運の
取つて代らん大隈が
品川馬車の乗合か
進む歩みを共にして

政府の失策まつかたや
國家の大事を忘るゝは

黨争私怨に日を送り
眞に慨嘆切齒の至り

欣舞 々々 愉快 々々

(殿江醉郷作)

此の風潮に連れて、青年倶楽部の壯士仲間も亦軟化するに至つた。選挙場裡に血を流し、或は演説會場に銃聲を聞いた昔に引きかへ、民黨吏黨の別なく、たゞ金のために動いた。選挙運動に一つの團體から民吏二手に別れて出て、狂言の争ひをやり、あとで大笑ひをしたといふやうなことも度々あつたが、やがて青年倶楽部も、此の眞面目を缺いた政治運動に厭きて、純正演歌壯士は社良改良主義に傾き、演説と歌と腕力で、米商濱野茂の買占め攻撃や、各地方に起つた二錢講と稱する詐偽的高利貸征伐を盛んにやるやうになつた。十一月、有名な東京市の疑獄、鐵管事件が起つた。

鐵管事件 (愉快節)

百萬の民の生命を繋げる水道に
毒を流して江戸城の

民を殺さん計略は

丸橋忠彌が捕はれて
昔話のそれならで
さても忌ましき水道の
東京市民が千秋の
水道事業の鐵管を
詐偽や投機に汚名も高き
傾く社運に策盡きて
試験に外れし不正品
納め埋むる奸才も
因果應報是非もなし
市政を行ふ名譽職
内にも賄賂に目がくらみ
司直に任ずる法官が
赤き 衣や麥飯
勞働苦役の天罰を
愉快ぢや 愉快ぢや

共に消えたる水の泡
濁らぬ明治の昭代に
奸計毒策聞けよ人
思ひをなして待ち受くる
受負ふ會社の大山師
濱野茂と雨宮
めぐらす魂膽憎むべし
吏員の眼をくらまして
埋もれ切れぬ慘境は
市民の爲に選まれて
重く擔ひし人々の
汚行醜聞あるとかや
公平無視なる判決に
看守の苛責を怨みつゝ
受くる時節もまのあたり

(醉郷學人作)

二錢講退治の歌 (愉快節)

世の中に何が敵ぞ生命と金よ
金が欲しさに大切の
飽く事知らぬ不義不道
彼が官途を免職の
給一貫その上に
今も記憶えて居るならん
煮めたやうなる穢さは
小人窮して亂すとは
兎や角せんと古谷奴が
廣島地方や静岡に
名前許りの大怪社
善男善女が日々に
儲けし金を欺きて
數萬を以て數ふべし

天理人道打ち忘れ
悪みても亦餘りあり
當時の容姿は双子縞
めめし兵兒帯見た人は
世にいふ三年醬油にて
實に鼻持ちならざりし
古昔聖人の金言ぞ
腦漿絞りし其の果ては
多くあつたる實業社
それをそのまゝ二錢講
一粒幾何の汗を以て
せしめ上げたる其金は
又それのみか世の中は

眞面目に稼ぐも追ひ付かず
絞り揚げたるお金にて
俄に紳士の装ひで
高島町の青樓に
悠々娛樂に耽るとは
斯る極悪罪人を
輿論の制裁加ふるは
愉快ぢや 愉快ぢや

不景氣勝ちなる今日に
金の指輪や金時計
今日は料理店明日は又
札びら切つての大盡風
言語に絶えたる舉動ぞ
社會の外に驅逐して
青年吾人の吾務ぞや

(不知山人作)

尙「鼠算にもない算用云々」の欣舞節もあつたが、一口二錢の掛金で、或期間には十五圓になつて戻るといつたやうな棚ぼた式の契約に皆ひつかゝり、(遂に拂戻された者のあるのを聞かなかつた) 慾張つた者は一人で幾十口も入つたものだから、一見零細の二錢講が莫大な高となり、古谷はそれを然るべく流用して膨つて行つたのだ。

歌の中に「高島町」とあるは神奈川の遊廓で、言ふまでもない、例の神風樓や「降るアメリカに

袖は濡らさじ」の喜遊の巖龜樓などで有名であつた。古谷瀧馬はわざわざ横須賀から神奈川まで遊びに來た。勿論一つは土地での遊興を憚り避けたのだが、外人や貿易商の豪遊ぶりを眞似たのもあつた。

私が此の「二錢講退治」や「鐵管事件の歌」を持つて横須賀に入つてゐる時、あとから殿江や中西三三郎が二錢講退治の演説をすべく乗り込んで來て、二ヶ所で開會した。

大瀧町の演説會の時、殿江は、元老及び諸大臣の豪遊の事を攻撃し、玉突が國威發揚の具であるかなど、調子よく、大受けであつたし、當時横須賀在住の壯士恩田某の如きは棧敷から「評し得て妙なり」と叫んだりしてゐた。(玉突は此の頃上層部から大流行)ところが大臣攻撃の言葉の端から何かの勘違ひであつたと思ふが、突然水兵たちが、「此處を何處だと思ふ、軍港だぞ、辯士無禮だぞ」と騒ぎ出したので、多數の水兵總立ちとなり、もう如何に解辯しても、座主が出て制しても治まらず、殿江にとに角演壇を下りて呉れと言つても、これ又カブリを振つて後を続けようとして頑張り、遂に座布團、火鉢まで飛ぶ大混亂となつた。

そこへ關東切つての大親分目金^{めかね}が舞臺へ現れて、マアマアと兩手を伸ばして押へる手振りをすると、ピタリと靜まつた。

殿江は裏から歸つて事無きを得たが、私は顔役といふものゝ妙な勢力に感じた。目金さんは關東一の俠客と呼ばれ、一名東屋さんと言はれてゐたのは、同名の料理屋を持つてゐたからである。目金老人が死んだのは其の翌年であつた。當時の新聞は其の人の經歷などを書き立て、惜しんだが、私は深い事は知らないが、とに角人望のあつた人である。

中西は晩年を不幸の中に終つたが、正義熱血の士であつた。男の子があつたが、どうしたか。

ドースル時代

二錢講騒ぎが終熄したあとは、墮落するばかりの風潮の中では、戰時的餘勢の「突貫武士」も「元氣節」もすたれ、醉郷學人の「東北漫遊」の歌もあつたが大したことはなかつたのは、(東北線の日本鐵道が全通したのは二十六年七月であつた、日本に未だ社會運動がはじまらぬ前、既に此の日本鐵道全線にわたる罷業があつたりした)東北が一般的題材となり得ない爲であつた。此の東北の暗

さは、實に地方的不幸であつたと言へよう。そして演歌の材料に窮した。私は殿江にも作歌してくれよと頼んだ。賣れさうなものを早く出版しないと、みんなが困ると話した。さうして出来たのが「皇國の華」であつた。

此の時は、久田鬼石は暫く不在であつた。選挙運動で浦和の監獄に入つたことが郷里に知れて親族間の問題となり、呼び戻されてゐた時であつたらう。かうした壯士生活が親達に理解されよう筈はなかつた。壯士演歌の先達も、遂に肉親の情絆には打ち勝てなかつたとみえる。(後、教育界に轉じることになつたが、政界に志を持つてゐた彼は、あの時もう少し、せめて板隈内閣の出来るまで、東京に頑張つてゐたら、その端緒に就いたのだとは、後年になつての彼の述懐であつた。)その久田鬼石が、久しぶりに俱樂部へちよつと立ち寄つた時は、もう此の新演歌が良く賣れるので、皆喜んで景氣づいてゐたのであつた。「皇國の華」は數篇の欣舞節其他で成つてゐたが、久田はその中の「戒放蕩」の一章を小聲で讀んでゐるのが段々節になつて行つた。

晝を欺く不夜城の

歌舞の菩薩の君たちが

格子にもたれて長煙管

吸ひつけ煙草の煙りにまかれ

石部金吉金兜

固き心もうわの空

飛んであがるや段梯子

引附座敷の酒もりに

飲めやうたへの大陽氣

その酒よりも彌増して

酔ふは手練の痴話口説

立てし屏風に鶯鶯の囀

語る陸言さよめ言

三十日に月の出る世ぞと

乗るや手管の口車

別れともなく後ろ髪

引かれて歸る部屋の外

お近い内にと口のうち

ぼんと叩いた背中の音は

骨身にこたへて忘れかね

親の意見も何のその

妻子の嘆きも顧みず

馬に念佛豆腐に釘よ……

久田は苦笑して、

「ぼんと背中を叩かれたりして、あんまり、皇國の華でもあるまう。」と言つた。その時私は腹で(久田氏は時勢にちよつと置き去りを食つてゐるな)と思つた。

縁日や夜店などで、度々香具師と衝突したり、青年倶楽部がケンカ倶楽部と仇名をつけられた時の倶楽部も變遷してゐる。太いステッキを振り廻して蠻聲を自慢にした、武骨一片の演歌壯士も消滅して、もう演歌者は喧嘩師ではなくなつたのだ。いつしか世態人情がそこまで来てゐたのである。

それに久田と殿江との作風にも、差違があつた。殿江のものには餘裕があつたやうに思はれた。横江鐵石の作歌には更に情緒のこまやかなものがあつた。

「戒放蕩」の外にも殿江の「墮落書生」や「女學生」「鼻下長紳士」があり、鐵石の「戒青年」「娘義太夫」にもあるやうに、世の風紀がひどく亂れて來た。ドール書生は此の時代の産物である。

當時の新聞も「流行歌の傾向を見れば社會の腐敗の程度を知る事が出来る」と慨嘆し、或は流行歌に關する種々の見出しを使つたりした位である。

娘義太夫（欣舞節）

婀娜に結びし投鳥田
生地を隠せし厚化粧
含む口紅媚めきて
虫も殺さぬ優すがた

紅裏つけし肩衣に

見塚控へて徐ろに

黄鳥徒跣の美音にて

酒屋梅忠廿四孝

塵の落つるも何のその

涎ながすと見て取りて

變な目付で秋波を送り

待合二階へ生捕りて

迷はず者に罪はなし

家財金銀幾何でも

様に鬢尾極引きしめて

眞に慶賀の至りなれ

欣舞 々々 愉快 々々

（横江鐵石作）

風潮卑しく、安逸頹廢、かつてゴツゴツの手織木綿を着て「衣は帯に至り袖腕に至る」と高吟し

禮儀正しく金紋の

伽陵頻迦が谷の戸出づる

語る御殿場野崎村

泣きつ笑ひつ 梁の

聴者は一切無我夢中

鼻下長らしき奴へ向け

目尻の下つた連中を

生血吸ふのも多けれど

迷ふ人こそデレ助なるぞ

這入る笑窪に陥らない

眞面目に淨瑠璃聞くならば

た書生が、一轉して光つた絹物を着るやうになり、學資は悉くこれを廓や矢場や娘義太夫追廻しに費すものが多くなつた。ドースル連なるものは皆書生であつた。彼等は一團になつて寄席に出かけ娘義太夫の簾すだれがあがると、

「待つてました、お天道さま——」

と眞ッ赤になつて掛け聲をしたり、下足札で調子を取つたり、さわりにかゝると、

「——そこですウ、」
とうなつてから、

「どうする、どうする——」

と熱狂するのであつた。そして太夫歸宅の俵の後について、送り狼をやつたものだ。これらの書生のことを「ドースル連」と命名したのは私たちであつた。丁度大正期に於けるペラゴロヤ、安來節の「アラ、イツチャツタア」連に比すべく、それらの元祖をなすものであつた。不知山人の歌に、

筆を手に取り 小首かたげて墨すり流し

國へ無心の長手紙

親をだまして取つた金を

みんなドースル運動費

などもある。不知山人、浮世三郎は當時の私の號である。(後私はのむき山人、おぼろ山人、凡人、啞蟬坊、臥龍窟主人、天龍窟主人、了閑など、號した。)此の歌は、四季の歌である。これは京都の花柳界で流行したものを作り替へたのである。

春はうれしや ふたりころんで花見の酒

庭のさくらにおぼろ月

それを邪魔する雨風が

ちよいと散らしてまた咲かす (元唄)

○
あきれそ。う。浪。口。に。忠。義。の。こ。う。し。や。く。し。て。も
醉。ふ。て。美。人。の。膝。ま。く。ら

不潔な娯樂に日を送る

チョイト不忠なひゝ老爺おやぢ

○

春の梅見に 紳士手を取る素的な美人

風が格氣でもすそ吹く

あづまコートの奥さまが

チョイトあわてゝ左棲

(不知山人作)

前者は勿論滄浪閣主人を諷したものだ。此の頃から「あづまコート」が流行り出したが、「あづまコートはぼろかくし」といふ言葉もよく言はれた。

尙その頃の風潮をよく映した法界節を幾つか並べて見よう。ホーカイ節は先に、私の入る前に久田殿江の作があるが、それは、

露と身と思へば輕き我が命

散りて聲りて敷島の ホーカイ

花は櫻に人は武士 忠勇凛々

と言つたやうな武骨なもので、節も亦豪壯沈着なものであつた。例の法界屋が、月琴を鳴らして歩いたのは全く違ふ。あれは別派のくづれであつて、壯士はあの淫卑なやり口を極度に嫌ひ輕蔑したものである。何かに演歌屋が法界屋から出たなどいふバカけた記事のあつたのを見たことがあるので、念の爲斷つてをく。

砲界 武士

辛酸を 嘗めて蒔きたる功績は

露の聖恩ひびきにうるほひて ホーカイ

咲いて麗はし新華族 百花爛漫

○

征清の 勇氣はいつしか消え果てゝ

因循姑息の淺ましき ホーカイ

變り易きは人ごゝろ 悲憤慨嘆

○ 見臺を 前に控へて勿體らしく

うなる姿はよけれども ホーカイ

數へ切れない親類 内職勉強

○ 人情に つれて起りし娘床

自稱粹子が絶間なく ホーカイ

鼻毛のばして剃りに来る 商賈繁昌

○ 江戸ツ子の 癩に障りて奸商の

招く被害は是非もなし ホーカイ

野蠻騒ぎは國の恥 注意肝要

○ 蠅の殻 ついて腐りし蠶の腹

永き月日の旅の空 ホーカイ

認めし日の出の旗印 残念千萬

○

別嬪の 世辭を着に葡萄酒ブラン

リキユウ泡盛龜の年 ホーカイ

飲めばノビール鼻の下 スゲニデレ〜

「辛酸を嘗め」た維新以來の功績者にそれぞれ爵位を賜つて「新華族」が簇出した。

「人情につれて」神田に初めて女の床屋が出来た。剃りながらよく男の面體に瑕をつけたものだがそれでも「ごめんなさいよ」の一言で、皆大して痛まなかつたらしい。

「江戸ツ子の」とあるは、サンライズやビンヘット、パージンなどを出してゐた村井煙草の所謂パージン事件である。パージンを賣る爲に景品をつけたのだが、それが賭博類似だといふので禁止になり、今度は新聞其他に大々的に廣告を出して、煙草に景品引換券を付けたのだが、方法が曖昧で引換券が小冊子の體をなしてゐたので氣早い江戸ツ子は、なんだこんなものでだましたのかと日本橋の村井の店を叩き毀した。(煙草の官營になつたのは三十七年七月)

「蠅の殻」は、布哇政府が日本の移民を拒んだので、外相大隈は軍艦を派遣したが、外交調はず、

ぼんやりと數ヶ月ホノルル港に碇泊してゐた浪速艦の艦底には牡蠣の殻が附着してゐたといふので大隈は國民の物笑ひを買つたのであつた。

俱樂部の精神

一般の書生の風儀は著しく亂れて來たが、俱樂部には俱樂部の、俱樂部風といふものが自然に備つてゐた。今日の所謂フューラーだ、指導者の精神は決して離れなかつた。其の精神から警世諷俗の演歌は作られ、うたはれてゐたことは明かである。微々たる出版物ではあるが、商人の利潤のみに目をつけてする商賣とは確かに違つてゐた。公益優先といふ奴だ。私などもあまりに「食はねど高楊枝」式であつたと思ふ。さうした氣呵から發して來る演歌であつた。殿江の「墮落書生」「戒放蕩」横江鐵石の「社會觀」や「戒青年」、久田の「護國」など、何れも堂々たる大文章だといへると思ふ。それ程眞實味もあり、先見の明もあつた。

感情の迸るまゝ、これを演ずるのだ。辭句の洗練を缺くことや、蕪雜不用意な文體などは問題で

はなかつた。いつも鋭い批評眼を持つて、誤りなき社會批評をしてゐた。當時日本新聞が壯士歌の蕪雜さを指摘して「嘔吐文學」だとけなした。萬朝報は第一面の社説に「流行歌に聴け」を以てしたことがある。岩野泡鳴は後に、流行歌は武装しない軍歌だ、流行歌を度外視してゐるやうでは適切な民情の視察は出來てゐないのだと言つた。

社會觀 (欣舞節)

住める大厦は建築の	妙技を盡し美を極め
纏へる衣は綾錦	乗りたる馬車は亞刺比亞の
逞ましげなる二頭立	車中の主は傲然と
馬尼拉の葉巻口にして	得ならぬ響り紫の
烟り吹きつゝ行先は	紅葉館や花月樓
到る處は歌吹海	酒池肉林の歡樂は
いかなる月日に生れしと	人の羨やむ華長者
高官紳士豪商よ	榮華に酔へる汝が眼には
淺草町の冬の雨	花町照らす秋の月

如何に見ゆらん映ずらん
光りも暗き家の内
足を伸ばれば隣りなる
大の體をくの字形
煎餅清團に柏餅
飢ゆれば潜る繩腰簾
井飯に濁り酒
食へぬ不景氣如何にせん
辛く其日を送れども
食事の料に差支へ
聞くも涙の種ぞかし
日々に劇しくなりまさる
想ひ回せば外國の
股蓋蓋し遠からず
思ひ来れば凜然と

欣舞 々々 々々 愉快 々々

軒に掲げし行燈の
終日業に疲れたる
人の肌はだに觸れやせん
一夜幾らの家根代は
結ぶ夢こそ果敢なけれ
椅子に代へたる醬油樽
鱈いわしや鱈もたら腹は
日々の勞働玉の汗
若しも雨降り風吹けば
甘藷さつまいもさへ食ひ兼ねる
嗚呼生存の競争は
廿世紀の前途を
共産黨や社會黨
靜かに社會問題を
膚はだに粟して肝膽寒し

(横江鐵石作)

戒 青 年 (欣舞節)

燒野の雉子夜の鶴
可愛の我子を手放すも
それと言はねど心に涙
食を過ごしてわづらふな
歸り來ん日を待つぞとて
勇む心も何となく
惜む別れの東の間に
窓に消え行く子の姿
思ひありしも夢の間に
花は五度咲きたれど
送る學費は怠らず
炎威赫たる三伏の
悪き疫ひのありと聞く
彼の品買はん是れ欲しき

親の心は皆一つ
末の出世と兩親は
寒さ堪へて風邪ひくな
錦を飾りて恙なく
恵みも深き言の葉に
顔に時雨るゝ子の涙
汽笛一聲西東
見送る親は斷腸の
いつか過ぎ行く五年の
花は五度散りたれど
花の朝や雪の夜
夏の暑さはとりわけて
都住居の氣にかゝり
藥代やいろいろと

便りの度に疑はず
父は好める酒を止め
朝な夕なに思ふ子の
雪に螢に辛酸を
期せし心の白糸も
蹴出す裳の緋縮緬
迷ふ心を悪友が
春の夕の小酒宴
金の力と知らずして
月も朧の柳橋
實にや一刻千金と
斯る才子は夜更けて
静かに思ひ回らして
冷汗背を濡らすらん

欣舞 々々 愉快 々々

言ふがまに／＼送りつゝ
母は衣さへ購はず
今の有様如何ならん
積みて一躍功名を
染まる都の華奢の色
姿なまめく雪の肌
誘ふ花柳の溫柔郷里
雪の朝の迎ひ酒
粹の通のと熱を吹き
落花雪降る仲の町
浮るゝ才子もありと聞く
萬籟なき學窓に
親の辛苦を思ひなば

(横江鐵石作)

護 國 (愉快節)

百萬の民の籠に炊煙は起ちて
豊に治まる國民が
民の富めるは朕か富と
寒夜に御衣を脱がせられ
天皇の最と優渥き
そとろ涙に暮るゝらん
斯る至難を堪へ玉ふ
國の政治を司さどる
小心翼翼慎重に
民の力を休むべし
馬は千里に嘶くも
如何に光りを放つとも
困苦を來らす事あらば
六千餘萬の同胞は

喜び祝ふ御代の春
詔らせ賜ひし故事や
民の疾苦を察しめす
聖慮の程を思ひなば
一天萬乗の至尊さへ
況んや君を補翼して
重き職務のある人は
國家の利益を計りつゝ
二頭の馬車にアラビヤの
黒の洋服燦爛と
國家の不利や人民の
更に其効なかるべし
協力一致撓みなく

勤儉尚武の氣風をば

養成なして皇室を

萬世不朽に守護しつゝ

世界に國威を輝かせ

愉快ぢや 愉快ぢや

(久田鬼石作)

政界上層部に在る者が、政權を私して其の争奪に日を送つてゐる時、私たちの仲間はこの歌をうたふてゐた。

「護國」の歌の如きは、今の大政翼賛會の主旨や、皇紀二千六百年祭の祝詞と何等寸分の相違もない。私たちは、常に天下の憂ひに先立つてゐたのだ。裸一貫ながら、護國盡忠の指導精神、確固不動の心構への盛られたこれらの演歌を掲げて、當時の民衆に呼びかけてゐたのである。

五十年後の今日、財閥らが、國家の容易ならざる難局に直面してゐながらも、尙執念深く、言を左右にし、必死に現状維持的の古い殻にしがみつき、自己の利益を失はざらんことに汲々としてゐる醜體と比べたら、天地雲泥の差なるに呆れ返つてゐる次第である。

此の時、横江鐵石が「汽車の旅」第一篇を作歌した。そして逐次出版して行つたのだが、此の東

海道汽車の旅の歌が、實に大和田建樹の鐵道唱歌より五年早く出てゐるのである。久田鬼石もこれを見て「これはいゝものだ。これだけの物を作るのは、大したものだ。」と言つた。横江鐵石はこれより先鐵血俱樂部といふ類似の演歌壯士の團體を作つて作詞してゐたのだが、やはり壯士の低調墮落に業を煮やして、純正演歌の青年俱樂部に來り投じたのであつた。

書籍行商社は神田代町一丁目九番地にあつたといふ赤木屋だが、「人情俱樂部」といふ雑誌を出してをつた。(一錢五厘であつた)後に日本館と改稱したが、主人公岡田常三郎の長男が五代目菊五郎の弟子になつてゐた。名女形といはれた死んだ菊次郎がそれである。此の行商社の寄宿舎に大勢の賣子がゐたが、急進分子數名で青年俱樂部に模して鐵血俱樂部を成し、(廿七年)作歌を岡田に出版させて賣つてゐたのである。横江、中丸貞藏などがその首腦であつた。

汽車の旅 (欣舞節)

百里の山河一睡の

夢を載せ行く汽車の旅

實にや泰西文明の

恵みを受くる我人は

送迎應接邊なき
汽笛一聲新橋を
左は遠く房總の
あかぬ眺めにあこがれて
義士の昔を忍びつゝ
品川驛も跡に見て
地下に眠れる鈴ヶ森
藍を流せる六郷の
いつか鶴見も打過ぎて
碧眼者流の心膽を
越えて忽ち神奈川や
横濱港の繁榮を
高地を占めし洋館の
一種の感慨起るらん
過ぎて忽ち大磯に
閑臥榮華の樂園ほろだいら

窓の景色を楽しまん
跡に出で行く芝濱や
沖に行きかふ眞帆片帆
右手に名高き泉岳寺
行けば程なく御殿山
恨みを吞んで罪人の
大森過ぎて行先は
川を渡れば川崎や
薩摩隼人が血氣の勇に
寒からしめし生麥も
出船入船賑はしき
見るにつけても丘上の
廣壯巍々たる建築に
程ヶ谷戸塚藤澤も
錦衣玉食元老が
空拳颯起早雲か

羽葉九世の基を立て
持久重圍に辛うじて
嶮路峻坂旅人が
巧みに鑿てる隧道は

豊太閤の雄略も
陥れたる小田原城
眼みし箱根を迂回して
晝夜明暗十餘ヶ所 (略)

第七篇まで、神戸に辿り着くのである。此の先鞭的歌詞は、大いに歓迎を受けたし、永く生命を保つて後々までも演歌の好材料となり、演歌者は流行歌の途絶えた時はすぐこれを演つた。これをやりさへすれば賣れたのだ。(たゞ四十年頃に至つて私が新設驛を増補し、全七五調にして一高寮歌「ああ玉杯」の曲に替へた。)

東海矯風團

實家の危機・レース工場

三十一年の春であつた。

久田鬼石が、關西へ行くとして、同志を誘ひに來た。江口源十郎、鈴木市郎、加納勝清を俱樂部から引き抜いて行くといふ。三人はもとより身輕氣輕だし、「太夫元についてゐりや大丈夫だ」と喜んでゐた。新しい旅が大いに彼らをそゝつたのである。私も誘はれたが、此の時私はどうでも一遍故郷へ歸らなければならなかつた。

實家の重大事と呼ばつてられたのである。

歸つて見て、私は一驚した。呉服商の弟奴が、父の實印を盗み出して、山と畑の大部分と、字六本松の水田を抵當に入れて江陽銀行と小田原の高利貸から金を借りてゐたのだ。眼前にその返済期

限が迫つて發覺し、弟は姿をくらまし、兄は狂はんばかり、母は泣き狂つてゐるといふところであつた。

私は父に逢つて、事の真相を訊した。

父の印を盗み出したといふのは、兄の手前を繕ふための父の作りごとであつた。やつぱり父がこつそり押してやつてしまつたのだ。そして兄は兄で、又別口でやられてゐたのである。

父は溜息を吐いて、

「お前が警告したのに、最初の出資に未練があつて、辰（兄）がどうしても捨てる氣になれなかつたので、到頭こんなことになつてしまつたのだ。」

と言つた。口惜しや父と兄は、小ずるい芳五郎にうまくしてやられたのであつた。

何としても、田舎不相應な借金を背負ひ込んでしまつたことは事實だ。利息を拂つて期限を延ばすにしても、更に残つた地所と屋敷を書き入れなければならなかつた。

協議の結果、別莊地として最も適當な「上の山の畑五六枚」を賣つて、他を浮かせよう、それより外に道なし、となつた。

賣るにしても、普通田地の相場なら直ぐにも賣れるがそれでは此の場合の役には立たないのだ。兄は、其の地所の圖面を何枚もこしらへた。そしてそれへ、

「相摸灘に面し、右に富士の山、伊豆半島、左に三浦半島、煙り吐く大島等々眺望良く、夏涼冬暖」など、うまい文句を書き加へた。(近頃の土地會社の廣告を見ると、私はいつも此の事を憶ひ出す。兄貴は實にその方法の元祖をなしたわけだ。呵々)

私は其の圖面を持つて、東京と横濱で賣り込みの奔走をすることになった。

横濱では、久方町の松島屋に陣取つて、幾多の人々に會つたり、各所を訪問もした。夜分は稀に演歌にも出たが、此の時ばかりは演歌にも身は入らなかつた。

地所の周旋屋を千三つ屋などいふことを、しみじみ知つた。千三つ屋は相手にしないつもりでも、向ふから入り込んで来る。直ぐにも賣れさうで、その實一向埒があかない。

松島屋にゐる内に、同じく泊り込んでゐた温品ぬくまといふ易者と知り合つた。彼は徳富蘇峰の「國民の友」にゐたと言ふので、色々話し合つてゐる内に、海員救濟會をやらうといふことになつた。海上生活者の救濟、連絡、そして向上を計らうといふのである。私は趣意書の原稿を作つてこれを弟

の善次郎に托し、大磯小學校の淺倉訓導に見て貰つたりして、印刷するばかりになつてゐたが、諸事にまぎれて遷延してゐる内に、やがて「海員救濟會」が出来たのであつた。

私は地所を見たいと言ふ者や、仲介人を伴つて、度々實家へも立ち寄つた。其の度に結婚の問題を持ち出されてゐた。

地所の方は、きわどいところまで行つては破談になり、容易に賣れなかつた。

横濱の義兄池田富治が、私の奔走や、實家の事情に同情して、種々なる便宜を與へて呉れた。

義兄の職は、美術工藝ドロンウオークとかレースカマリとかいふより、「ハンケチ屋」と言つた方が、一般に通じ易かつた。

横濱には、早くから此のハンケチ屋といふものが澤山あつた。ハンケチを賣るのではない。材料は商館から出すのだが、それにカマリ、刺繍の加工をして、アメリカへ輸出するもので、義兄は長い間、此の業をしてゐるし、相當手廣く、支工場もあつた。さうだ、その時義兄が屢々口ずさんでゐた歌がある。

横濱の名所を知らない人に

横濱名所を知らせたい

イギリス波止場に公園地

野毛の山ではノイエ

野毛の山では時のお鐘が ボーン／＼

當時流行の「名所節」の一章である。義兄は酒は飲まず、どつちかといへば几帳面な生活ぶりであつたが、義太夫が大好きで、それが家風になつて、一家揃つて子供まで、さわりをうなりながら刺繍をしてゐた。

仕事は好調で、丁度、もつと擴張しようと思つてゐた時であつたので、私の兄にこれを傳授して、支工場のやうにすることになつた。そして大磯の實家へ、女工養成の教師を差し向けたりして面倒を見るやうになつた。

これが一時大成功を見せて、兄は獨立して大々的にやりはじめた。二十五六の支工所まで出来るやうになつた。

殊に上等物がこなせたので、後には米國まで名が通るやうになり、極上の物になると、アメリカの元方から、「これは必ず大磯の添田工場で仕上げさせなければいけない」など、指定付の注文までされるやうになつた。

兄は、勘定日の前日には、横濱から多額の金を鞆に詰め込んで歸つたものだ。そして郷里も隣村までも潤ほして大得意であつた。

その爲に、當の借金の方は、「なアに、利送りさへして置けばいゝ」と言つて、負債を苦にもしないほどになつた。

義兄は更に私に結婚をすすめた。そして兄や母を説いて、同意させて置いて、直接私を説くために、東京まで數度足を運んで來てゐた。

そして、やがて私は妻を迎へて、本所番場町へ、はじめて一戸を構へることになるのだが、その結婚式へは、媒介役の義兄、池田富治、竹内要作と共に、實家の兄も來たのだが、負債の事などけろりと忘れたものゝ如く、レース工場の話にばかり花が咲いてゐた。

自由黨解消

一方政界では、相變らず元老輩が、政權を宛も私有物の如く、その争奪に日をおくり、何か好問題が起る度に、内閣を乗つ取つたり乗つ取られたりしてゐた。

二十九年八月、伊藤博文のあと、黒田清隆總理を兼任して、翌九月松方正義總理となつたが、三十年は忽ち黒田内閣となり、三十一年一月伊藤博文とつて代つて間もなく自由黨進歩黨提携の大隈内閣成つたと見る間に、山縣内閣となつた。三十三年には再び伊藤になつたが、その伊藤内閣成るに先だち、九月に伊藤を總裁に政友會が出来た。自由黨の轉身である。自由黨は、近頃流行りの言葉の發展解消をしたのであつた。私たちには感慨なきを得なかつた。

此の年、外には北清事變が起つて、七月、第五師團が支那に出動した。

新政黨 (欣舞節)

國の爲より己が爲

矯めて憲政有終の

立ちし滄浪侯爵の

雲の如くに集れる

是れぞ立憲政友會

天下敵なき優勢は

若しも内部を窺へば

高襟黨や實業家

わけて病の膏盲に

首腦となせる結合は

肉を得たらん其時に

股鑑蓋し遠からず

思へば吾人一片の

されど老後の思出に

染めて立ちたる老雄の

侯上揮へよ大手腕

私利に趨れる政黨を

美果を成さんと大呼して

風を望みて忽ちに

濟々多士の一團は

下院に占むる過半数

いとも熾んに見ゆれども

千種萬類玉石同架

薩派進歩派帝國派

入れる自由派其のものを

張儀が所謂一嚮の

群犬相囓む恐れあり

憲政黨の興廢を

杞憂なくして已むべきや

蹶起一番鬢髪を

胸に成竹ありぬべし

欣舞 々々 愉快 々々

(横江鐵石作)

政 界 (欣舞節)

長袖なりと侮りし
停會までも停會と
下院は二十七票の
決議の案も否決され
足腰延ばす春敵侯
紅燃ゆる友禪の
結ぶ間もなく外交の
滿洲朝鮮問題や
實にや五月蠅き政界よ
國の光を曇らせず
流石侯爵大勳位

貴族の氣勢凄じく
十五議會の騒がしさ
多數に見事不信任
重荷下ろしてやれくと
酔ふて樂じきブランデー
膝を枕に華胥の夢
舞臺またしも眠はしく
露清密約何の蚊と
樂でないのは政治家よ
國の利益を失はず
快刀亂麻を忽ちに

處する腕前拜見の
十二師團の陸軍や
海に浮べる大艦は
増税々々また増税
されど熱誠送り
聲を聞けかし人々よ
君の國なり民の國
花咲く春に浮かされな

欣舞 々々 愉快 々々

(横江鐵石作)

北清事變には、「太沽陥落」「天津占領」「決死の傳令」等の欣舞節があつた。突貫武士が又うたはれ、痛快節が出来た。

此の時、救世軍の自由廢業運動が起ると前後して、ストライキ節が流行つた。熊本の東雲樓に娼妓の罷業が行はれ、そこから起つたといふので東雲節とも謂はれた。(私は一昨年九州遍路の途、東

雲樓にも立ち寄つて見たが、今は此の事も傳説となつてゐて真相は掴みがたかつた。さつき生の考證もあるからこゝには省くが、次の歌詞が残つてゐる。

東 雲 節

祇園山から二本木見れば

コリヤマタナントシヨ

金も中島家も質

シノメノ ストライキ

サリトハツライネ テナコトオツシヤイマシタカネ

一般には、「何をくよくよ川端柳、水の流れを見てくらす」の古い歌詞が、代表的にうたはれてゐた。私は横江鐵石と合作で次の作替をしたが、冒頭のものがいままでもうたはれてゐた。

自由廢業で廓は出たが

ソレカラナントシヨ

行き場ないので屑拾ひ

ウカレメノ ストライキ

サリトハツライネ テナコトオツシヤイマシタカネ

高利貸でも金さへあれば

コリヤマタナントシヨ

多額議員でデカイ面

アイドンノ一ヂスライキ

サリトハツライネ テナコトオツシヤイマシタカネ

星をさゝれて千枚張の

コリヤマタナントシヨ

面も少しはシヨゲかへる

シユウワイノ シリワレテ

サリトハツライネ テナコトオツシヤイマシタカネ

工事誤魔化しお金を儲け

コリヤママタナントシヨ

藝者ひかして膝枕

シユウワイノ シリワレテ

サリトハツライネ テナコトオツシヤイマシタカネ

(鐵石・不知山人作)

痛快節

伊達にや飾らぬ十二の師團

三十萬噸大い艦

腰の團子の用意も出来た

行けば行けます鬼ヶ島

エライ決心東雲ならぬ

法官社會のストライキ

骨のないのは海鼠に海月

たぬき幫間タイコモチ

豚を追ふのは許さぬならぬ

酒も過すな管巻くな

それに構はぬ獨逸と露西亞

豚を捕るとて騒ぎ居る

藝妓學校ある世の中よ

俳優學校も出来る筈

娼妓學校が若し出来たなら

鼻毛讀むのは高等科

(不知山人作)

收賄は至るところに行はれた。星亨は大阪取引所に絡む收賄がばれた。當時代表的の利権屋であつた。(翌年三十四年に刺されて死んだ。)

すべてこれ金、金。節義も何もあつたものではない。これが上下おしなべての風潮であつた。既に私たちに、政治方面への興味はまったく失せ果てゝゐた。壯士と稱してゐたものゝ内、壯士芝居を志したものを除く外は、だんだん亡びて行つてゐた。

演歌者も多くは旅に出たり、個々に間借りをしたり、残り少なくなつて青年俱樂部は衰運に傾いてゐた。

俱樂部の消滅

殿江醉郷は北清事變のはじまる前に、上州新報へ入ることになつて、前橋へ去つてゐた。出立の日、私は上野停車場まで送つて行つた。

「なアに、すぐに歸るよ。——向ふから、歌を作つて送るからね。」
さう言つて行つたが、それなり、歌も送られては來なかつた。

その時私は、北林（學生で演歌者）と錦町に間借りをしてゐた。それは、俱樂部に於ける、悪質の壯士たちの、廢殘的雰圍氣を嫌つてゐた。

衰微した俱樂部に残つた少數の、悪質の亂暴壯士と、私たち演歌者とは、勿論ソリも合はなかつたし、更に悪は悪の仲間を呼び、エタイの知れないものが入りするやうになつて、私たちも偶にしか覗かなかつたが、おばさんも、ゴロンボ（ごろつきの意）ばかり來てうるさい、と愚痴をこぼすやうになつた。

それらのゴロツキ壯士は、よく飲食店で「キツバラヒ」といふことをした。キツバラヒの語は、議會で豫算を削減する「査定案」なるものが出た時から、壯士仲間が言ひはじめた。遊興、飲食の金を、幾分か拂つて済ます意味に用ゐられた。キツバラヒとも査定するとも言つた。勿論それだけ

ではなく無錢遊興、無錢飲食もした。

友達に飲みに行こうと誘はれた時、金が無いと言へば、相手は「切拂へばいゝ」などと言つた。

その爲に、近所へ迷惑をかけたり、亂酒狂暴、遂に警察から追はれることになり、家の名儀人たるおばさん達までも捲き添へを食つて、遂に淋しく、青年俱樂部は解消したのである。明治三十四年であつた。

北清事變前後は、私にとつて、實に陰鬱な、いやな時代であつた。

思へば伊東のおばさんとも、長い馴染であつた。主人の安市氏は、薬を製造して地方行商に絶えず出かけてゐたが、（色々な薬があつたが、「ベルツ丸」といふのだけが頭に残つてゐる）要するに此の伊藤家が、青年俱樂部の壯士の意氣に同感して、その家を提供し、その温床たらしめたのであつた。私が俱樂部に入つた頃は息子の儀一郎さんが、築地の工學校に通つてゐたが、これが川崎に（大師行きの）電車會社が出來た時にそこに勤めることになつて、川崎に移つてゐた。おばさん達はそこへ落ちて行つたのである。勿論息子さんに引き取られたことは、當然な、寧ろめでたいことであつたと言ふべきかも知れないが、私たちの、青年俱樂部的感情から言へば、どうしても落ちて

行つたといふ風にしか思へなかつたのである。

倶楽部の先輩たちは、皆何處へ、どうしてしまつたであらう。

久田鬼石は、江口、加藤、鈴木を伴つて大阪へ行つてから、暫く、「浪速酒革」「神戸兵庫名所之華」などを作歌して、演歌をやつてゐたが、それなり消息を絶つた。(教育界に投じたのである。後、下の關で邂逅した。)

江口はそのまゝ、大阪に踏み止まつてゐる内に、香具師になつた。鈴木も後、東京に歸つて香具師の親分になるのだが。——赤江金十郎は、兄貴の赤江景昭を滔にされて、にやり／＼してゐるお人好しだつたが、どうしたか。

田中正造は、鑛毒問題を提げて議會で終始一貫、二十年間怒號した人だ。いつの議會であつたが、芳川司法大臣を指して、アノけだものは何んだ、と叫んだり、種々な問題を捲き起こしてゐたが、其のチョンマゲ頭のまゝの晩年、三河島の木下尙江氏の家でめぐり遇つたことがある。(その時翁は素人宗教論を語つてゐた。尙江は、素人の論をこそ聞かなければいけないのだ、と言つてゐた。それから約一年後、谷中村の盛大な葬儀となつたのだつた。)

エライ人もゐた。酒飲みもゐた。風變りもゐた。横田といふ男は、柔道家で、大阪から東海道を道場破りをしながら上つて來たといふ、雲つくやうな大男であつた。それが後にはドーブル連の中に入つて、頑固な體に絹の着物などを着せてゐたといふをかしたこともあつた。其の頃ドーブル仲間で喧嘩をして、三十人を相手に九段で決闘をしたが、無事に歸つて來たといふので賣り出ししたりしたが、演歌は頗る下手であつた。食溜めといふ藝當を持つてゐた。金の入つた時に、一度に色々な、食ひたいものを食ふと、それで二三日は、そのまゝ平氣であつた。

「横田の奴、今日で三日、何も食はないやうだが、どうしたかな。」

「昨夜遅く、みんな寝てしまつてから、臺所へ下りて水を飲んでゐた。」

そんな挿話もあつた。

富張は横濱で京濱新聞を興した。宗は鐵道院に入つて某驛長になつた。

伊藤友治郎は追はれて、朝鮮、支那から南洋まで飛んだ。(南洋に二十年、今は南進問題の先覺者だ。)

潮田節次は月岡清の名で地方廻りの新派劇の座長になつた。加藤も、吉村も、中野信近も、久保

田六丸（干城となる）も、皆壯士芝居を経て新派の役者になった。

行方のわからぬ者も多いのだが、その中で、特に横江鐵石のことがしきりに思はれる。あれだけの才能を持つて、どこへ、どうなつてしまつたのであらう。酒はよく飲んだ。酒さへ飲んでおれば、何の肉體的慾望もなく、泰然と、氣嫌がよかつたこと、殿江醉郷と同斷であつた。或は酒の爲に、身を亡ぼしてしまつたのではなからうか。——そんなことが考へられるほど、杳として、たよりはないのである。

家庭・二八新報

私の浮草のやうな放浪の生活は、親兄弟や親族間の苦の種であつたことは明かであつた。又、演歌に生きるといふやうなことは、「常識」から理解される筈もないので、私も強ひて理解させようとはかりもしなかつた。

だが周囲からは、私をいつまでも獨身で置くことはよくない、女房を持たせ、身を固くさせると

いふので、世話好きの義兄や周囲から、寄つてたかつて義理責めに事を運んで來た。

思へば私も既に三十になつたのだ。「三十にして立つ」といふから、それもよからうといふ風に考へて、承知した。世帯といふものを持つた。持つたといふよりも持たせられた形であつた。

江東番場町の家には、幾枚もの看板を掲げた。

一つは「愛柳舎」、これは家號。一つは「家屋物品火災保險會社取次所」。これも、叔父の家と、其の友人の家との二軒加入させた限りで、あとはホンの板看板のかけ放し。一つは「二八新報發行所」、これは蕎麥屋の機關新聞で、友人淺井金太郎との共同經營であつた。

淺井の家は、淺草福富町十七番地で、名物桃太郎團子の横を曲つて行くと、こゝにも看板が何枚も掲げてあつた。親父は蕎麥屋職人寄子の親分であつた。周旋業ではあるが、蕎麥屋職人専門で、これは明治十七年の創業、もとは江戸名物の八丁堀、與力の果てであつた。

頭丈な太い格子造りの家。二階には二十七八人の寄子がいつもごろ／＼してゐた。下の表座敷を、私と淺井が新聞編輯室にしてゐたが、時々聞えて來るのは、

「板前さん一人、〇〇庵です。」

「出前持と板前を、藏前の數——」

などの帳場口の聲であつた。寄子たちは順次に、申込みがあると働きに出るが、二三日で歸つたり、其の日に歸るものさへあつた。さうして二階でごろごろしてゐるのだ。それが蕎麥屋者の常であつた。

それらの弊風や、さまざま矯正すべきものがあつた。其の使命のために、發刊されたのが、二八新報であつた。私は六ヶ月勤務の職人が、賞品を貰つて表彰される記事を書いたこともある。淺井は、こんなのは實に稀だと言つてゐた。

淺井の友人石丸元治は、私の家の裏座敷へ、一人の老母と共に同居することになつた。石丸も淺井も、生ツ粹の江戸ツ子であつた。

石丸は靴職であつたが、道樂が過ぎて、失敗の結果、苦勞して、自轉車のサドルの破れたのを、手縫ひで着せかけることを始め、それがあつていゝ金を取つた。元はサドルの皮のハジケたのは其のまゝ投げてゐたものだ。石丸はサドル着せ代への元祖であらう。

廣告取扱の交詢社にしばらくゐた中丸貞藏が來て、二八新報の廣告取りになつて、私の家へ寢泊

りするやうになつた。

義兄池田は、長男政夫を東京の學校で勉強させるために、私に監督を托した。私の末弟善次郎は私の家から師範學校へ通學してゐた。

妻は高座郡菱沼の出身、姓は太田、名はたけ子、太田傳次郎の妹。裁縫教授の免狀を持つて、それをまだ使用せず私に嫁したのである。禮儀正しく、私の外出する時は、必ず玄關に送り、丁寧に「おはやく——」と言つてお辭儀をする、良妻であつた。

或る日、政夫が風琴を鳴らしてゐるところへ、青年俱樂部にゐた鈴木市郎が訪ねて來た。そして、「——いゝ家庭ですなア、」とほめたり、更に又、政夫の方を見やつて、

「音楽といふものは奥床しい、氣を和らげます。」

と言つた。彼は性粗暴であつたが、此の日は妻に遠慮したものか、多くを語らず、此の頃ユニテリアン協會へ行つてゐます、など言つて、歸つて行つた。

家の内は皆親しく、賑かに暮らしてゐた。和氣霽々たるものであつた。

そこへ旅から歸つた高橋須磨男が訪ねて來て、演歌の材料がなくて困るといふので、私は手持ち

品を與へて置いて、更に新演歌「警鐘」を出版した。

間もなく、千葉縣成田の若葉虎次郎といふ男が、演歌をやりたいと言つて來たので、高橋に連れさせることにし、後數種の材料を作つて、二人の便宜を計つてやつた。幸ひ、二八新報の齋藤印刷所が、厩橋向ふにあつたから、これは易々出來た。

無音に過ぎてゐた叔父の家へも、妻を伴れて行つたり、叔父の長女（花ちゃん）が遊びに來たりしてゐた。それがバツタリ遊びにも來なくなつたので、少しヘンだとは思つてゐたのだが、それはなんと、私が二八新報へ書いた「滑稽演説・おてんば娘」のことからであつた。

それは、無教育な母親が、我儘な「おてんば娘」を作り上げるといふ話の筋で、學問より遊藝に身を入れた、其の時代の弊害を諷刺したものであつた。

「花ちゃん早く仕度を成さい、學校がおそくなりませう」とせき立てられると花ちゃんは「お母さん今日は學校休まして」と駄々をこねると「ア、いゝよお休み、だがお稽古は休ませないよ」といふ風に、母と娘の對話で押して行くのだが、その「花ちゃん」としたのが悪かつたのだ。花ちゃんが無教育な母親へも話し、これは故意に私のことを書いたものに相違ないと、すつかり感違

ひをしてしまつたのである。

妻は、花ちゃんが誤解して勝手に怒つてゐるのですから、こちらから辯解がましいことを言はずに捨て、置きませうねえと言つた。

私も同じやうに感じた。妻は頭のハッキリしてゐる女であつた。

「八王子のおばさん」といふのが出入りするやうになつた。呉服物を織元から背負つて來て、年寄り仕事に賣つて歩く人で、横濱の義兄小川兼吉（船鍛冶工）の縁りの者であつた。

後金でいゝからと言つて、反物を置く。妻は勧められるまゝに置かしてゐた。私の服装は整つてゐたし、外見は豊かな家のやうであつたが、内實は逼迫してゐた。「世帯」は二人とも慣れてゐなかつた。慣れてゐる筈もなかつた。

其の頃私には肩の凝る癖があつて、よく政夫にたゝいて貰つた。

「政ちゃん、又すこし、たゝいて呉れよ、煙草錢をやるから、」

といふと政夫は、煙草錢でなくツても、豆錢でいゝと言つてたゝいてくれるのであつた。

かた豆を二錢買ふと、菓子器に一ぱいあり、それが一日分なので、毎日買つてゐた。それへ誰で

も手を出してつまむのであつたが、政夫は、

「中丸さんが手を出すと一ぺんに減つてしまふから駄目だ、」

と言つて、大男の大きな手で、ガサリと大づかみにされるのを恐れてゐた。年の暮になつた。

妻は賃仕事の裁縫に暇を惜しんだ。

大晦日の晩の如きは、障子を隔て、夜業する石丸と競争で、

「眠くなりませんか。」

「大丈夫です。」

と時々聲をかけ合ひながら、たうとう徹夜した。

私はうすら明るくなる頃、石丸と兩國の歳の市へ、お飾りを買ひに行つた。

新派・朦朧車夫・「雪紛々」

さうだ、正月前にをかした事があつた。善次郎が學校も休暇になつたので田舎へ行つた。親戚を廻ると、何處でも土産をくれるものだが、それが皆、餅や蕎麦や味噌の類である。そんならうちの餅も持つて行つて貰ふべえといふ調子でしこたま出して呉れるのだ。善次郎は出されるがまゝに受け取つてゐるとだんだんかさばり重たくなつて遂には持ち切れなくなつたが、律義なものであつた。これを、生木を伐つて遽かづくりの天秤にして、擔いで、歩いて歸つて來た。途中で天秤の棒が折れてしまつたので、又代へて來たと、何やら生木の枝の皮がすりむけてゐる天秤の荷を、やれやれといふ風に下ろした。

その頃は通學は勿論何處へ行くにも乗物には乗らなかつた。それにしても、百姓の野良歸りの荷ほどは充分にあつた荷物を擔いでとことと田舎から歸つて來たのには呆れたものであつた。

家の中は萬事うまく行つてゐたが、たゞ若葉虎次郎だけが、どうも性質のよくないところがあつたので皆にも嫌はれてゐた。演歌の方にも見込みがなかつた。無頓着な私もやがてこれは斷ることになつたのだが、その時家を出て行つてから、交番へ懇へたりする、つまりはそんなうじうじしたからみ方をするやうな男であつた。

高橋須磨男がヘンなことをはじめた。その頃淺草の常盤座で、水野好美が大将で「奨勵會」の新派をやつてゐた。多士濟々であつた。敵役の岡本貞次郎、女形の小島文衛、河合武雄。それに中野信近、佐藤歳三、柴田善太郎、青柳捨次郎、福井茂兵衛。その中に越後源治郎といふ滑稽役者がゐた。顔もぼつてりしたチンクシャでをかき味があつたが、舉措が一々滑稽なので頗る人氣を占めてゐた。これに高橋が凝つてしまつたのだ。どうしてもあゝいふ役者になるのだと言ひ出して、話をつけて越後のところへ通ひ出したのである。勿論金など貰へる筈もなかつたので、夜は演歌をやりながら通つてゐた。

それで、途徹もなく大きな緋の羽織を着てみたり、書生履の白い鼻緒をわざわざ眞ッ赤なものにして得意になつてゐたのを見て、妻もよく笑つてゐた。

中野信近は既に相當の人氣を得てゐた。彼は壯士の中から、多大の抱負と意氣込みを持つて芝居の方に入つて行つたのである。芝居を民衆的啓蒙の具にしてやらうといふのであつた。然しさて入つて見ると、中々思ふやうには行かなかつたらしい。「中野さんもやつぱり只の役者になつて行くのか」と居残り壯士たちに呟かれたりしたが、潮田節次の月岡清も此の中野の下に先づ入つて、

新派役者になつたのである。

俱樂部時代であつたが、潮田たちはよく壯士芝居を見に行つてゐた。(壯士節と壯士芝居の、仲間の感じで只で見られもした)酒も飲んだが、雪の夜など酔つて俱樂部へ歸つて來ても、うろろしてゐて中々入つて來ないのだ。雪の中で一とわたり、芝居が、りで「然らば拙者が」など、ひよろひよろやつてゐるといふ風であつた。

私も常盤座を時々覗いたが、その頃はちよいと往來に出ると、すぐもう朦朧車夫が隨いて來たものだ。肩をすりつけて、「旦那、行きませう」と何處までも執念く隨いて離れないのだ。井戸鐸英は坊主の出で俱樂部にゐた壯士だが、その頃は事件屋になつてゐた。長髪であつたが、これが執念く車夫に隨いて來られると、振り向きさま、「バカッ」と一喝した。それが彼の車夫撃退法であつた。ところが中丸貞藏は、のつそりした大男であつたが、むつとり屋で、何時までも黙つてゐる方だつた。「旦那、行きませう」を食つても黙つて歩いてゐるのだ。いつまでも隨いて來る車夫が、何度目かの「ねえ、行きませう」をいふと、

「——行きねえな、」

と、ぼつりと言つて、歩きつゞけてゐるといつた風であつた。

年が明けると、間もなく、青森第五聯隊の八甲田山雪中行軍に、一隊悉く凍死したといふ惨事が報ぜられた。私はこれを直ちに作歌して「雪紛々」と題し、東海矯風團の名に依つて出版した。これは非常な賣れ行きであつた。版を重ねても重ねても、飛ぶやうに賣れた。私はこんなに賣れる演歌をたつた二人で材料に用ゐるばかりなのを惜しいと思つた。

すると中丸が、本屋へ出したらいゝとすゝめた。彼は書籍行商社に永くゐたので、その方面の事情をよく知つてゐるのである。私がおの方をやります、といふので、「雪紛々」の紙型をそのまま、上質紙に刷り、表紙だけ色刷にして店頭に出すことにした。(演歌の材料は俱樂部時代からザラ紙であつた。)

月末になつて、中丸が本屋を廻つて來ての報告は意外であつた。殆ど残本がない。追加だ追加だと言つた。落合直文と大和田建樹の雪中行軍の歌も並べてあつたが、私のほどには賣れてゐないといふのであつた。

一つには、こちらのは原價が安かつたので、本屋の扱ひもそんなところに微妙な作用があつたの

かも知れぬ。とに角中丸も勢ひ込んで、判取帳を作つて本屋廻りをしてゐた。

然し、その大受けの「雪紛々」の回収も、私は一度か二度しかしなかつた。中丸は、二八新報の千葉松兵衛(白牡丹の千葉は、天狗の岩谷と並び稱された當時の煙草王)の廣告料受取り旁々、判取帳を持つて出て、それなりもう私の家へは戻つて來なかつたからである。

男の子・茅ヶ崎

妻の産期が近づいた。

石丸の母親は、お産の心得について、世間の實例をひいて聞かせたり、親切に炊事も補助して呉れた。私は故里の親達に、手紙で知らせた。

女の大役、初産のことではあるし、妻の母は必ず來るといふ想像を私たち二人は語り合つた。或は二人の母が、揃つて來るかも知れないと言つて心待ちに待つてゐた。

もうあと一週間位と迫つた時、期待に反して私の母が一人で來た。そして菱沼の母の上京出來な

くなつた理由を眞ッ先に語つた。

飛び立つばかりの思ひであつたらう。來たかつたには違ひない。それが、どうしても家を抜けられない事故が出來てゐた爲であつた。妻の兄が詐僞にかゝつて負債を得、その處置をする爲に義兄池田等が入つて解決すべく骨を折つてゐるのだが、菱沼の父は氣が小さい人であるし、家の中が混亂状態であるといふのであつた。

母は炊事から、産衣の裁縫、産後の用意何くれとなく働いて呉れた。

産婆は今晚中に生まれると言つて歸つた。

母も私も、そわそわしはじめたが、結局夜中になるだらうと話しながら夕餉をすまして、母は産婦の枕元に、私は家の中の整理をしてから、風呂に行つた。

然しゆるゆると湯に浸つてもゐられなかつた。急いで歸つて、格子をガラリ開けると、座敷の眞中に座つてゐた母が、振り返つて見た。私が近寄つて行くと、母は、

「生まれたアよ——男だよ。」

と言ひつゝ抱いてゐたのを私に手渡して、満面に喜色をたゞへてゐた。其の眼には涙をうかべて

ゐた。

黙つて受け取つて抱いた私は、抱きしめて、やゝしばし、ジーツと子の顔を見つめてゐた。

妻は産後の経過といふよりは、その前からリュウマチスの氣味で、よく膝頭をさすつたりしてゐた。それが産後の静養中に少々ハレ出したので、そのまゝ寢所から出なかつた。無論乳は不足であつた。

私は産婆の、うぶ湯以來の湯に入れる様子を見てゐた。ミルクを飲ませると、湯に入れるのは私に課せられた重要な仕事であつた。

子は健かに育つた。

知道と命名して、出生届をしたのは十日後であつた。

須磨男はおエビスさんのやうな笑ひ顔をして、度々家の中で抱いて靜かにゆりながら、

ア一二わも進上、わしや荷はいらん

飛脚屋なんぞこそ荷を持つて參ろ

ア一三ばも進上、わしや酒やのまん

など、私たちには初耳の、九州の子守唄をうたふやうになつてから、母は安心して歸國した。程なく、不通になつてゐた叔父の家からは「花ちゃん」が出産祝と妻の見舞とを兼ねてやつて來た。そして叔父が、汽船の方をやめて、今では小名木川の安田の製釘所へ機關係で通つてゐるといふことを聞かせた。

(後、此の安田製釘所は、職工に受取りで仕事をさせた。職工達は普通の二倍三倍の賃金が得られるのを喜んで働いてゐた。大量の生産過多。幾年後までもう生産の必要なしとあつて、従業員を全部解雇して工場は閉じたが莫大な利潤を占めた。(これは私益独占といふのだ。)従業員はすぐまごつた。其の中に、私や石丸と知り合つた「重さん」といふのもゐた。

叔父は、製粉會社へ轉じた。)

妻は床を離れて、ブラブラして居られるやうになつた。風呂へも行きはじめたが、子供を入浴させることをこわがつて、たうとうそれはいつまでも私に任せきりになつた。

八王子のおばさんが來て、お祝ひに袖を半反くれた。妻はおばさんが來る度に分納金を幾らかづ

つ渡してゐたのだが、此の時はその金がなかつたので、車代として少し渡して言譯をした。

主婦として借金の言譯が出来るやうになれば一人前だと思つた。

妻は世帯馴れて來た。馴れて生活難を知つた。

私も足りない身上しんじやうの賄ひやうはなからうと思つた。

ハツキリと經濟生活に入つた。

子を育てるといふ心構へから、煙草も一段下げて安いのをを用ゐるやうになつた。

私は百姓の家に生れながら、幼少の頃から性質がどこか貴族的な我儘者であつた。それに怠け者であつた。食物なども周囲の者より贅澤な方であつた。

親父になつたのだから、さうしたのも矯正して、シツカリしなければならぬと思つた。

兄の工場も、義兄の工場も、益々盛んであつた。殊に義兄は茅ヶ崎へも工場を開かうとして工夫を回らしてゐた。妻には裁縫の免狀を取る前に、レースの経験があつた。そして大磯の兄が始めた時は教師の一人として、兄の工場の女工達を教へてゐたのである。

義兄は度々上京した。彼の弟は東兩國に呉服店をやつてゐたし、政夫のゐる爲もあつたが、事業

擴張の事を語つたのは、内心私たちに茅ヶ崎の工場をやらしたかつたからでもあつた。然し私の性質も過去もかなりよく知つてゐたから、私の前では切り出しにくかつたのだ。それを内々妻に語り妻の方から相談を切り出した。

結局私も子のために、一奮發して、こゝで一番その工場を發展させて兄のやうにならうかと思案するやうにもなつた。が、心の裡には、いろいろのものが闘つてゐて、容易に何れへも決し兼ねてゐた。

一度も來たことのなかつた淺井のオヤチが私の家へ足を運んで來た。何事かと起つたのだなど直感された。

「金太郎が三日前から歸らない。金太郎が借金をしてゐたが、其の期間が切れて債權者が押しかけて來た。悪い金貸であつた。」

それを私に整理談判をしてくれと言ふのであつた。

これは即夜うまく話がついて、淺井のオヤチと兩國廣小路で一酌したが、オヤチは與力時代の昔話などをして上機嫌で歸つて行つた。おきに金太郎の居所もわかつて、親子間の問題も落着はした

のだが、借金の方はオヤチが引き受けなければならなかつたので、金太郎も種々具合悪くなり、こゝに資金難を來たし、二八新報は一年足らずで廢刊の憂目を見ることゝなつた。

私は本氣で工場の方をやる氣になつて、番場町の最初の世帯をしまつた。

石丸は他へ移り、須磨男は演歌を持つて旅に出た。

番場町別れの日、花ちゃんの手には、私たちが置き去りにする雜品の中から拾つたものゝ包、叔父の手には鉢植の桑が提げられてゐた。

(後年、その桑が叔父の庭に大木となつて茂つてゐた。)

先づ横濱へ行つた。工場をやるについては先づ自分から一應仕事を心得なければならなかつた。

その習得に、池田の工場に寄つたのである。住居は池田が構へてをいてくれた。四十日。そして茅ヶ崎へ移つた。三十六年の冬の終りであつた。

驛前の、釜成屋といふ古い饅頭屋の前角が私たちの新しい家であつた。隣は肴屋といふ宿屋で、鐵道院の車掌が何人か、交替の時の宿にしてゐた。

開業祝には、大勢集つて、私たちの首途を盛んにして呉れた。茅ヶ崎にたつた一人の藝者も呼ば

れた。私の下工場をやることになつた神主の杉崎鍋之進が首をふりふり田舎唄をうたつてゐた。私たちは希望に燃えた。

ある朝であつた。寝てゐる戸を叩かれて出て見ると、大磯の父が、まだ明け切らぬ戸口で提灯を吹き消してゐた。立流しを作つて運んで来て呉れたのであつた。忘れぬ印象である。さうして父は、まだ整はぬ家内のあちこちを、泊り込んで直して呉れた。

菱沼の父も來た。これは爐端に座つて、氣嫌よくお茶を飲んでゐるばかりであつたが、とに角誰も彼も、私たちに快い後援を送つてくれたのである。池田や大磯の兄の盛業ぶりを見てゐる者には當然私の成功も期待されてゐた。

それにも拘らず、うまく行かなかつた。

二十人ばかり職工が集つたが、これがどうしてもそれ以上殖ゑないのである。茅ヶ崎には前から經木編みの仕事があつた。賃金はこちらの方がいゝのだが、經木編みの方は日錢になる。さういふ仕事は多く漁師の子供たちがやるのだつたが、漁師はどうしても日錢をほしがる。こちらは晦日拂ひで、私が横濱から金を受け取つて來て渡すのだが、それを待てないのだつた。此の點が、百姓の

子たちを集めてゐる大磯の方とはまつたく事情が違ひ、そして致命的な違算であつた。

且つ職工の質が落ちてゐた。二十人の内満足なのは僅かに三人位で、あとは中々手が上らなかつた。さういふ者たちの面倒に手をとられるので、勢ひ教師格の者の能率も上らなかつた。

一人の職工の親が米屋だつたので、そこから米を取ることになつたが、そのおやちが工場の食事のことなど色々面倒を見て、「なアに、鹽氣さへあればいゝんですよ」などと言つた。

姪の小川のお新が子守に來ることになつたが、それが來るまでは、子供は乳母車へのせて、それに風車をさして、いつも肴屋との間の廂影へ寝かせてをいた。時々覗くと、風車が廻つてゐた。

肴屋へ泊つてゐる車掌の一人が、交替で來る度に、乳母車を覗き込んであやしてゐたが、深く氣にも止めずにゐた。

すると或る日、宿屋の女中たちが、きやつきやつと騒いで、「加納さん、いやだよツ」などと言つてゐる聲を聴いて、横窓から顔を出して見ると、車掌の服を着てゐるのですつかり様子は違ふが、面影が似てゐる。

「おゝ、加納君ではなうか。」

振り向いた顔は正しく加納勝清であつた。久田鬼石に従つて大阪へ行つたまゝ、消息を絶つてゐた彼は、車掌になつてゐたのだ。

「——なんだ、それではあれは、君の子供だつたのか。」

と、加納は乳母車へ顔をやつた。大笑ひになつた。

それから彼はよく、神戸の牛肉を土産にぶら下げて來たりした。

川上一座が來た。月岡清のゐた一座も來た。細君は衣裳方をしてゐた。御難續きだつたといふその一座が、遂に解散になつて、月岡夫婦が私の所へ來て泊つて行つた。その時どういふものか米が悪かつた。南京米が混じつてゐたのだ。その南京入りの飯を食つて、夫婦は東京へ歸つて行つた。

私は仕事のことでも屢々横濱へ往復してゐたが、杉崎鍋之進もよく同行した。彼はかねて俳句をやつてゐたので、道々そんな話も出て、私もはじめて俳句をいぢることになり、その運座の仲間入りをした。

その運座で、十千萬堂紅葉を呼んだことがあつた。その時の軸の句が、

松影や月の砧の手くらがり

といふのであつたが、尾崎紅葉を格別エライとも思つてゐなかつたから、さしたる印象も残つてゐない。

遂に半年で、私の工場は止めなければならなかつた。

菱沼の、妻の實家の一室に移つた。

妻は裁縫教授で學校へ出ることになり、自宅にも弟子を取つた。

私はひとり、京坂の旅に出た。

日露戦争前後

關西の旅

私は名古屋へ降りた。演歌を携へてゐたのである。

大須観音の脇の安宿「綿屋」といふのへ着いた。そこにはてきや達が多く泊り込んでゐた。「チヤカ助節のおばさん」といふのもゐた。チヤカ助節といふのを流して歩くのだが、名古屋ではそれが流行してゐた。

名古屋よい所ぢや覺王殿が出来る イ、ヂヤナイカ

數多の信者が來いぢよつて待つちよる

鳥が啼かうが夜が明けよが

お寺の木魚がオンムク／＼ムク／＼

と鳴らなきや歸しやせん

ナジヨナ ナジヨソーヂヤゲナ

ズ、デンズノ スツチャカチャカスケ ドン／＼

名古屋には三蓋松の澤井がゐるといふのでこれを訪ねて見たりした。

香具師澤井とは、地所の問題で横濱の松島屋にゐた時知り合つたのだ。その時、その仲間で寄居一家の隠居が來るといふのでその歓迎の會を松島屋でやつた。私も同宿の誼みもあるので列席したが、それは香具師の儀式張つたものではなく、くつろいだものであつたと思ふ。そこに飯島の源ちゃんも來てゐた。(後、關東てきやの大親分)その頃は源ちゃん／＼と言はれてゐたが、私は先に東京で顔見知りだつた。よく縁日へ姿を見せてゐたが、言葉の優しい、物柔らかな男であつた。人心收攬の徳が具はつてゐたと思へる。

澤井は茶屋町にゐて、貝入のひゞ薬などを若い者に賣らせてゐた。二十前の聲のいゝ乾兒もゐたので、私は思ひついて、四季の歌其他の小唄を作つてやつた。それをピラ刷にしてうたひ添へたらよからうと智恵をつけたのであつたが、調子はよかつたやうであつた。

私が大須門前で演歌をやつてゐた時、香具師の一人が歌本を買つて行つたと見える。そして「これはマブだからね、」と言つてゐたと言つて澤井は笑つた。マブとは眞正の物といふ意味で、てきや達は、仲間の物はガマセネタ（いゝ加減なもの）だといふ卑下した概念があつたのだ。だから縁日や夜店で仲間の何か新しい商品を見つけたりした時、「これはマブですか」——本物ですか、と訊くことが失禮ではなかつたのである。

ところが今度は私が、演歌をすませてから大須の脇の射的屋で興じて、キンカ糖などを持つて行つた時に、澤井は見るなり、「なんだ、あんたがそんなものをガンで来るなんて、——あれはワリゴトつて言ふんですよ。やつぱり素人は素人だなア、」と呵々大笑した。

皆が名古屋はいゝところだ、これから西は警察が喧しくて駄目だから、こゝに止まるやうにとすめた。

私は名古屋流の丹前を作つた。これは腰の脇を紐で結ぶ、上ツ張りのやうでもあつたから、其のまゝ何處へ行つても脱ぐ必要はないし、外套代りの防寒具にもなる。これで腹さへふくれてゐれば、何處へ寝てもいゝ。時には野宿をしても差支へない。——私には、思ひ立つた西行きを止める氣は

なかつた。

丹前のまゝ、演歌をやつた。さうだ、丹前で壇上に立つたこともある。

綿屋に泊り合はせた一色の網元が、私の歌を聴いて、面白い、ぜひウチの方で舞臺でやつてくれと、引張つて行かれた。一色の桔梗座。萬事は網元が仕切つて町廻りの太鼓も廻したが、まつたくの獨演である。妓達や商賣屋のおかみさん達も、毛布を持つて入つて来る。一つうたひ終ると太鼓が入つて、下りて来て一服しては又出る。洗ひさらひうたつたが、中心は愉快節である。その時つづく、壯士節には味がないと我ながら思つた。壯士節は街頭で囀鳴るもので、小屋の中でやるには適しないのだ。それでも一杯入つたが、定めし一遍ぎりでこりこりしたことであらう。

熱田や多治見、名古屋近邊も一と周りしたので、岐阜に進んだ。

岐阜には眞鹽勘三郎が香具師になつてゐるといふことを聞いてゐたのである。彼はヤキツギをやつてゐた。彼は岐阜に落ちつくまでは、駒田好洋と幻燈を持つて廻つてゐたといふ。（駒田といふ男は、「頗る非常に」といふ口癖があつたと眞鹽は笑つて話したが、後年、活動の方へ入つても「頗る非常に」は相變らずだつたと見えて、結局それで有名になつたのはをかしたものである。）

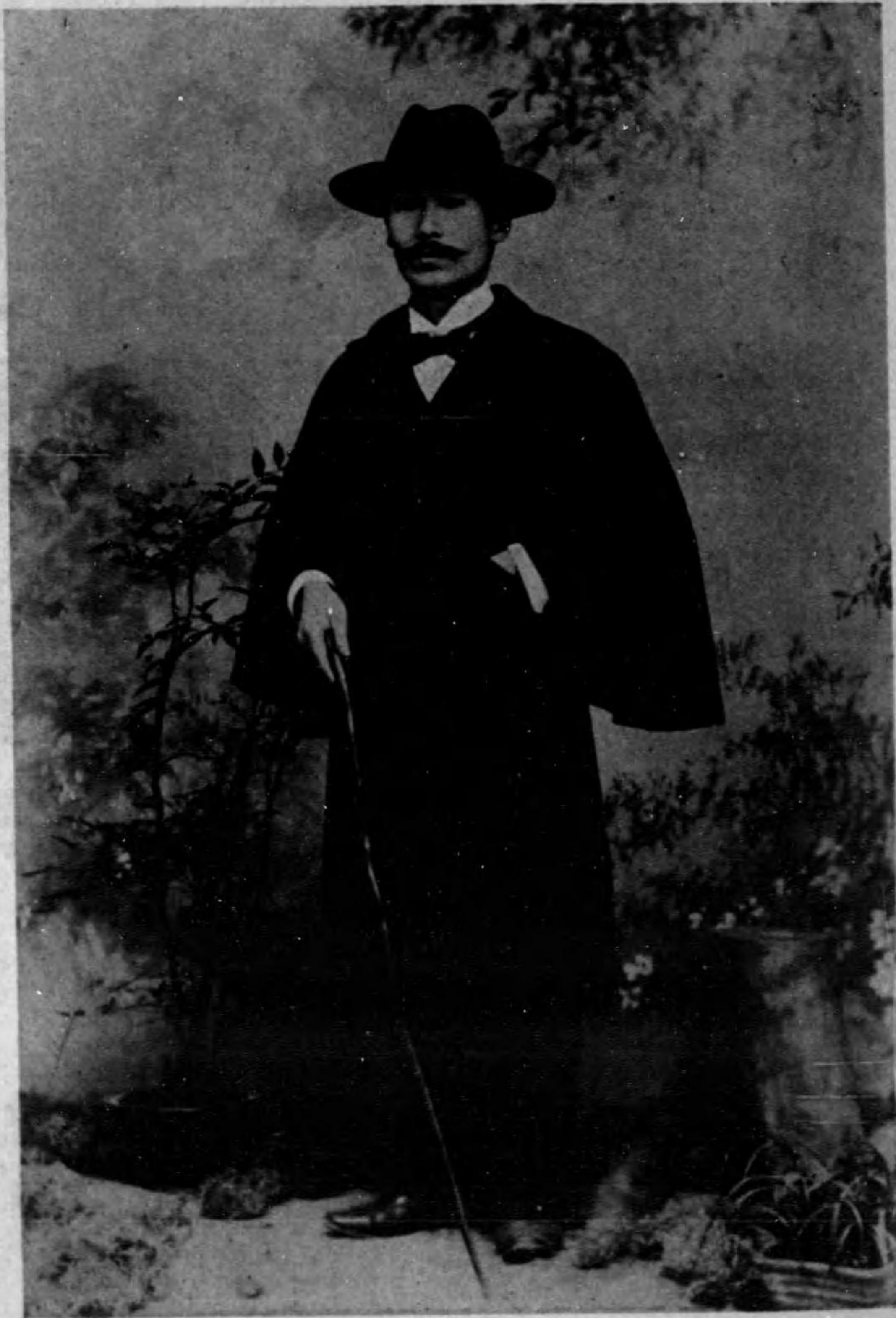


明治三十三年の著者

岐阜では、堤甚七も香具師でいゝ顔になつてゐた。これは鐵血俱樂部にゐた男だが、演歌をやつてゐても、その仲間中でも妙に親方ぶるところが目についてゐたが、やつぱり性の赴くところへ赴いたのであつたらう。

岐阜に暫く。そして伊勢大神宮に詣つた。詣つてから宿をとつた。そこで知り合つたのが、「監獄太郎」の渡邊であつた。演説遣ひである。女房連れで泊り込んでゐたが、ぜひ演説を助けてくれといふのである。土地の妓樓瀧田屋のおやちが顔役で、壯士芝居もやはりその手やかゝつてゐた。その間の一日を、壯士芝居の方を休ませて彼の演説會をはさんでくれたのだが、それが今夜に迫つてゐる、ぜひ頼むと言はれてこれを助けることにした。

監獄太郎の演説は、低級な官吏攻撃、警察攻撃に過ぎなかつた。私は日清戦争當時の状態から説き起こして、大和魂の發揚を辯じた。「赤心機關を抱きつゝ、蒸汽の漏洩ふせぎ止め」といふ演説もあつたのだが、スチームパイプが破れて蒸汽濠々たる中、身を以てこれにしがみついて一死艦を守らんとした話や、水雷の飛んで来るのを、これに飛びついてその方向を轉じたといふ話をひいて海軍々人の手柄を揚げたりした。(その頃中央(東京)では、開戦論非戦論が喧しく、わきかへつてゐた。



明治三十七年の著者

岐阜では、堤甚七も香具師でいゝ顔になつてゐた。これは鐵血俱樂部にゐた男だが、演歌をやつてゐても、その仲間中でも妙に親方ぶるところが目についてゐたが、やつぱり性の赴くところへ赴いたのであつたらう。

岐阜に暫く。そして伊勢大神宮に詣つた。詣つてから宿をとつた。そこで知り合つたのが、「監獄太郎」の渡邊であつた。演説遣ひである。女房連れで泊り込んでゐたが、ぜひ演説を助けてくれといふのである。土地の妓樓瀧田屋のおやぢが顔役で、壯士芝居もやはりその手やかゝつてゐた。その間の一日を、壯士芝居の方を休ませて彼の演説會をはさんでくれたのだが、それが今夜に迫つてゐる、ぜひ頼むと言はれてこれを助けることにした。

監獄太郎の演説は、低級な官吏攻撃、警察攻撃に過ぎなかつた。私は日清戦争當時の状態から説き起こして、大和魂の發揚を辯じた。「赤心機關を抱きつゝ、蒸汽の漏洩ふせぎ止め」といふ演説もあつたのだが、スチームパイプが破れて蒸汽濺々たる中、身を以てこれにしがみついて一死艦を守らんとした話や、水雷の飛んで来るのを、これに飛びついてその方向を轉じたといふ話をひいて海軍々人の手柄を揚げたりした。(その頃中央(東京)では、開戦論非戦論が喧しく、わきかへつてゐた。

「臥薪嘗膽」は伊藤博文の言ひ出した言葉だが、三國干渉以來の軟柔外交も、臥薪嘗膽、他日に備へる雌伏であるといふのであつた。愈々昂つて日比谷には國民大會が開かれたりしてゐたのだ。演説が大好調で、降りて見ると、監獄太郎は木戸の上りをそつくりさらつて、姿を消してゐた。私には何も飛ばツちりも來なかつたし、分前はとれなかつたものゝ、演歌があるので、一向困りもしなかつた。

鳥羽港を見て、紀州を廻らうと思つたのを止めて戻り、「芭蕉」の柘植にも泊つたりして大阪へ出たのだが、途中どこであつたかは思ひ出せて來ないが、子供たちが大勢で、「ロチャコイ〜」と廻らぬ舌で囃すのが妙に節めて聞こえるのから、「ロチャコイ節」を思ひついて、これを作つた。日露間の風雲は愈々險しかつたのだ。

東洋平和に害ありなど、

無理な理窟をつけをつた ロチャコイ〜

○

一天四海をわが物顔に

無禮極まる青目玉　ロシアコイ／＼

○　今は勘忍袋の緒さへ

切れて鋭き日本刀　ロシアコイ／＼

○　日本男児が血潮を流せし

遼東半島今いかに　ロシアコイ／＼

○　なぜかお前は八方美人

わたしや一筋國のため　ロシアコイ／＼

○　花は今だよいざ諸共に

駒に鞍置け日本武士　ロシアコイ／＼

○　黒鳩赤髯もろかなはぬと

白旗立て、青い顔ロシアコイ／＼

(不知山人作)

大阪・日露戦争

大阪は、千日前の横、河内屋に宿をきめた。市中を一と廻りして、演歌に適當な場所を物色もした。千日前、心齋橋筋、日本橋通りもよかつたが、道頓堀が一番よかつた。

河内屋には、中學生くづれの金子といふ男が泊り込んでゐた。歌のうまい奴で、なんでもうたふが、殊に博多節などをうまくこなしてゐた。

シデ紐を卸して廻る「源さん」といふのもゐた。まだ二十位の、北越の出だったが、大阪は商人が多いので、思ひついてははじめたといふシデ紐が、根もよかつたのだらうが、時勢にうまくはまつていゝ商賣になつてゐた。源さんはシデ紐屋がびつたり板についてゐた。

其の外、をかした者も澤山泊つてゐたが、氣の置けない宿で、宿の爺さん婆さんも、客をつかまへて「源さん／＼」と呼んでゐるやうな具合であつた。

大阪が一と通りのみ込めた時には色んな知合ひが出來たが、中にも金子は私に隨いて廻つて離れ

ない。演歌をやりたいといふのである。これを連れて紀州を廻り、加太の浦から和船で由良に渡つた。途中雨になつた。小さな和船で雨具の用意もない。ぐし濡れになつた。例の丹前も水には敵しやうもなかつた。遂に熱を出して、宿へ着くなり寝込んでしまつた。三日。宿へ来る目明きの男按摩があつたので、軽くやつて貰はうかと、肩を叩かせてゐると、按摩はしきりに何をおやりになるのかと聞いた。そこで、演説をやるのだが、こゝではそんなことは駄目だらうと笑ひながら言ふと、按摩は、それぢやアあんた方の事を、うちの旦那に話せば屹度出來ますよといつて歸つた。そんな事をあてにもしてゐなかつた。ところが按摩がやつて来て、旦那に話したらやつてもいいといふからすぐ来て呉れとせき立てた。

按摩の出入りする旦那筋なのであらう。逢つて見ると、寔に男氣のある有志であつた。かうして按摩の橋渡しで演説會を開くことになつたが、それには今こゝに問題がある。杉の植林計畫を繞つて騒いでゐる。既に杉苗は植ゑてしまつたが、反対側はそれをひつこ抜くといきまいてゐる。何年経てばこれがかうなるといふ事を演説の中で一寸言つて貰ひたいといふのであつた。

それにしても私たちの風體が香ばしくないといふので、羽織と白縮緬の太い兵兒帯を私に貸して

くれ、金子には下駄と金巾染の兵兒帯を買つてくれた。

會場といつても格別ないところだ。それでも相當廣い家であつた。面白い演説會であつた。一切向ふがやつたのだが、途中で聴衆の中を、金を集めて廻るのだ。

もう一と晩やつてくれといふ好況であつた。宿錢も悉皆拂つて呉れた。立たうといふ時、挨拶に行くと、按摩を洲本まで送らせよう洲本座で又やつたらいいと、按摩に萬事ことづけてくれた。そして「これを」と言つて、佛壇のやうなところから持つて來たのは、二日分の演説會の上りであつた。それをそつくり寄越すといふので、色々な費用もあるし宿料も拂つて貰つたのでいらぬと言つたが、どうしても呉れるといふ。貰つて、按摩に送られて、別れて來た。

洲本座はふさがつてゐて駄目だつた。按摩とも別れた。

何處であつたか船の中で、新聞を見ると、此の時はもう開戦となつてゐたが、旅順港閉塞、廣瀬中佐の壯烈な戦死が大きく報ぜられてあつた。

私は直ちにこれを作歌して、大阪に歸つた。隅田天神堂に托してこれを出版した。

軍神廣瀬中佐（欣舞節）

花は散れども香を残し
堂々五尺の大丈夫が
旅順港口閉塞の
忠勇義烈の勳を
我海軍は勇ましく
四艘の舟を沈めんと
四艘の汽船に乘込みし
廣瀬中佐は福井丸
「地位に向ひて彈丸の
首尾よく船を乗入れて
導火線に火をば點ぜしめ
なんなく任務を遂行し
ボートの中にうつしたる
杉野孫七見えざるは

人は死すとも名を惜む
「いかで瓦全を計るべき
任にあたりし決死隊
「いざや語らん聞けよ人
彌彦、米山、千代、福井
「選ぶ勇士は六十と四人
四組の勇士其中に
部下を指揮して目ざしたる
飛び交ふ中を物とせず
「装置なしたる爆薬の
轟然ひびく爆音に
「いざ引上げんと隊員を
折しも一人兵曹長
如何なる故ぞ如何にせし

「杉野々々と叫びつゝ
大半沈めど顧みず
「深き中佐は此處彼處
更に影だに見えざれば
折から飛び来る敵弾に
腦漿あたりに四散して
勇士を血汐に染めなしつ
あゝ目覺しき其最後
残る偉功は赫々と

再び飛び乗る福井丸
部下を愛する眞心の
探ね廻りし甲斐もなく
餘儀なくボートに乗り移る
「うたれて中佐は粉みぢん
ボートあやつる同乗の
「壯烈極まる名譽の戦死
五體空しく朽つるとも
「千代に入千代にかほるらん

悲壯ぢや 悲壯ぢや

（不知山人作）

ロシヤコイ節と廣瀬中佐を持つて、演歌に出ると、素晴らしい反響であつた。金子はもうすつかりうまくなつて一人立ちでもやれるやうになつてゐた。新演歌の評判は同時に私の評判でもあつた。然しそれが、よく賣れるといふので、「よく上げる」とか「よく上げた」といふのである。大阪で

はさういふ評判が殊にうるさく且つ早くひろまるのであつた。

源さんがすっかり面白くなつてしまつて、歌を覚え込んだが、「わしもやりまつせ」と演歌に隨いて來るのである。やるなら一人で勝手にやりたまへといふと、一人でやりはじめた。尤もシデ紐の本職があるのだが、それはそれ、これはこれ、兩天秤で、夢中になつてゐた。

戦争になると、これは日本人の悪い癖だが、相手の下等な悪口をいふ。日清戦争の時のチャンチヤン坊主式に、露助、青目玉其他様々の言葉が飛んだ。その調子に乗つた感じもあつて、些か慚愧の至りだが、私もそんな風な歌を遂次作つた。

寂 滅 節

泣き面を、蜂が刺すとは露國の狀態よ

「因果應報寂滅々」

馬賊はドシドシ暴れ出す

内亂ゴタ／＼大騒動

軍は海陸負けつゝけ

おまけに國では虚無黨が

「因果應報寂滅々」

長の年月日の本を

青い目玉で嚇しつゝ

「甲斐もなく／＼寂滅々」

跡へ拙者がマカロート

コレモ冥土へマカロート

小國なりと侮りて

暴慢無禮を極めたる

アレキ死夫が逃げ出だす

ノコ／＼出て來たおん大將

「軍艦諸共寂滅々」

黒鳩キンで候と

苦勞は絶えんと改名し

今では歌法螺を吹き盡し

マゴ／＼キヨロ／＼したととも

もはや野心も水の泡

威張つた勇士も此頃は

「コレモ間もなく寂滅々」

青息吐息のスラブ族

輝く正義の旗風に

「因果應報寂滅々」

要害堅固の旅順さへ

正義に勝てる筈なしと

早く降参するがよい

「露國全體寂滅々」

「笑止千萬寂滅々」

お氣がついたら一刻も

もしもグズ／＼してをれば

(不知山人作)